「駒は乙女に頬染めさせて」登場人物表

橘川寿々芽（２５～２９）ＪＲＡ所属騎手
早坂姫香（２０～２４）右同

（以下の人物の年齢については登場時のもの）

海老原剛市（５６）木本厩舎・厩務員
三門久和（５０）調教師
木本泰道（４９）調教師
晃子（４５）泰道の妻
桃谷旭延（５３）調教師
前園浩紀（２５）ＪＲＡ所属騎手
舘誠（３５）右同
海野穣一（４７）右同
颯希（１５）穣一の娘
アルヌール（３０）ＪＲＡ所属騎手
林原（５５）マリアラパスの馬主
朝倉寛一（６１）レナーテの馬主
美途（１４）寛一の姪
大里正純（４７）育成牧場場長
仁美（３５）正純の妻
伽耶（４）正純夫妻の双子の娘・姉
沙耶（４）右同・妹
千堂駿太（２３）装蹄師
浜田（３８）スポーツ紙記者

マリアラパス号　ＪＲＡ所属の競走馬・牝馬
レナーテ号　右同

その他

○京都競馬場・全景
空から俯瞰で。

○同・スタンド
十万人を超える観客で超満員のスタンド。

○同・芝コース・ゴール地点
ゴール地点に設置された《エリザベス女王杯》のピンク色のゴール板装飾。

○同・地下馬道
出走各馬が通っていく。その最後、１８のゼッケンをつけたレナーテ号と鞍上の橘川寿々芽（きっかわすずめ）（２９）、人馬がゆっくりと通る。

○同・本馬場入口
地下馬道を抜ける寿々芽とレナーテ。
光が溢れる。大歓声が響く。レナーテを止める寿々芽。
合図を送る寿々芽。走り出すレナーテ。
人馬の姿、光の中に吸い込まれるように消えて――。

○メインタイトル
〈駒は乙女に頬染めさせて〉

○栗東トレーニングセンター（以下栗東トレセンと表記）調教コース（早朝）
テロップ〈以下、T〉【四年前】
ウッドチップコースを疾走する調教馬。その鞍上の寿々芽。

○同・調教コース・調教スタンド前
調教馬から降り、調教助手に馬を引き渡す寿々芽。隣の調教師が訊く。
調教師「どうやった？」
寿々芽「ソラを使うことはなくなりました。ただ油断すると行きたがりますね、まだ」

調教師「そうか。おおきに。最近評判やで。ええ攻め馬してくれる言うて」
寿々芽「はぁ、ありがとうございます」
調教助手に曳かれ帰っていく馬を見送る寿々芽。

○同・敷地内の路上
自転車に乗っている寿々芽。

○同・独身者寮の前
自転車を止め、中に入る寿々芽。

○同・寮内の食堂
朝食を摂っている寿々芽。同期騎手の前園浩紀（２５）がはす向かいに座る。
浩紀「おはよ」
寿々芽「――おはよ」
浩紀「なあ、昼から映画観に行かへんか？」
寿々芽「はぁ？」
浩紀「一応誘ってやってるねんけど」
寿々芽「なによそれ」
浩紀「いやぁ、寿々芽最近ずっと暗い顔してるから気分転換させたろと思うて。あ、勘違いすんなや。悪いけど寿々芽俺のタイプと全然違うし。前から言うてるけど」
寿々芽「あんた殴られたいわけ」
浩紀「おー怖。おまえな、そんな口しかきかへんからいつまでも男できひん――」
ギロッと浩紀を睨む寿々芽。怯む浩紀。
寿々芽「いろいろお気遣いありがとう。でも昼からもやることたくさんあるのでけっこうです！」
鼻白む浩紀。黙って食事を続ける二人。
浩紀「今週乗り鞍はよ？」
寿々芽「ないけど」
浩紀「ちょっとは頑張れよ。見境なしに競りかけていった『ケンカスズメ』はどこいったのよ」

寿々芽「そう呼ばれるの、好きじゃないし」
浩紀「このままやと競馬学校首席卒業だけが勲章やぞ」
寿々芽「……Ｇ１勝ったからって偉そうに言ってんじゃないわよ」
仏頂面で食事を続ける寿々芽。

○同・三門厩舎・馬房内
馬房内清掃や飼葉の準備などの仕事をしている寿々芽。調教師の三門久和（５０）がやってくる。
久和「寿々芽」
寿々芽「はい」
久和「最近、よそ回ったりはしてへんのか」
寿々芽「はぁ、あまり相手にしてもらえないっていうか……」
久和「ポンコツ厩舎に所属したのが運のツキやったなあ、おまえも」
寿々芽「わたし、そんなことは……」
久和「どこでどんな巡り合わせがあるか分からん。営業も大事な仕事やぞ」
寿々芽「はい」
去っていく久和。清掃を続ける寿々芽。

○同・木本厩舎・事務所内
テーブル前のソファに座っている寿々芽。調教師の木本泰道（４９）が前に座る。頭を下げる寿々芽。
泰道「アニキに言われたか、営業のひとつもやってこいって」
寿々芽「あ、はい、まあ……」
泰道「俺のところきて嫁さんのケーキ食って帰るのは営業とは言わんぞ」
寿々芽「……すみません」
泰道の妻、晃子（４５）が来る。
晃子「もう、いじめんといてあげてよ。だいたい兄やんがええ馬を寿々芽ちゃんに回してあげんのがあかんのや。はい、どうぞ寿々芽ちゃん」
寿々芽の前にコーヒーカップとイチゴケーキの乗った皿を置く晃子。
寿々芽「すみません、いただきます」

ケーキを口にする寿々芽。
寿々芽「うわ、やっぱい。なに、これ」
晃子「でしょお。馬主さんからイチゴたくさんいただいてね、それつぶして練りこんでみたんよ。特製〈あまおうスペシャル〉や」
寿々芽「こんなの食べたことない」
二口、三口とケーキを口に運ぶ寿々芽を見て泰道が苦笑して。
泰道「尻に火がついてもええぞ、寿々芽」
寿々芽「え？」
泰道「早坂姫香や。知ってるやろ」
寿々芽「はい」
泰道「今年から女性騎手が二人になるんや。東西に分かれてる言うても、比較されることに変わりはないんやからな」
寿々芽「はい」
晃子「ああ、そうやったわね。アイドル歌手みたいな顔の女の子。競馬学校の卒業式にマスコミたくさん来てたんやってねえ」
泰道「先輩の意地、見せんとな」
寿々芽「はい」
泰道「おまえに乗ってほしい馬がいてたら、馬主さんに話し通してから連絡するから」
寿々芽「はい、ありがとうございます」
泰道「ええか寿々芽。騎乗の機会が来たら、今まで以上精魂込めて乗ってみろ。掲示板に載らんかったら引退や、それくらいの覚悟で乗るんや」
寿々芽「――はい」
晃子「あかんわ、そんなん。寿々芽ちゃん引退したら、ここに来てわたしのケーキ食べてもらわれへんようになるやん。なあ」
泰道「なにを言うとるんや、おまえは」
寿々芽、笑う。

○阪神競馬場・パドック【二週間後】
パドック最終周回。寿々芽騎乗馬の手綱を曳いている厩務員の海老原剛市（５６）。無言の二人に声が重なる。
剛市（声）「顔色悪いぞ、緊張してるのか」
寿々芽（声）「まあ、それなりに。お尻に火がついちゃってるもんで」
剛市（声）「おまえ、寿司はなにが好きや」

寿々芽（声）「はい？」
剛市（声）「寿司はなにが好きか訊いとる」
寿々芽（声）「お寿司ですか。シマアジとか好きですね。あとカンパチも大好きです。めったに食べられませんけど」
剛市（声）「生意気な舌しとるな――奢ったる。カンパチの握り食いたかったら勝て」
寿々芽「それって回るところですか」
剛市（声）「あたりまえじゃ。回らん寿司屋はＧＩ勝ったらじゃ」
寿々芽（声）「ケチンボ」
　無言で周回を続ける二人。

○同・芝コース
　第三レース発走前。スタート地点へ向かう各馬。
誠「寿々芽」
　第一人者の舘誠（３５）が寿々芽の横に来て声をかける。
寿々芽「あ、誠さん」
誠「一緒のレースに乗るの、久しぶりやな」
寿々芽「そうですね」
誠「木本先生にええ馬乗せてもろうたやん」
寿々芽「はい」
誠「そろそろ今季初勝利といきたいなあ」
寿々芽「はい」
　浩紀がやって来る。寿々芽の横を過ぎながら。
浩紀「あ、誠さんダメっすよ。こいつと話してるとツキ全部逃げてって勝てるもんも勝てなくなりますから」
寿々芽「あんたねぇっ！」
　笑う誠。
×　×　×
　発走。一斉に飛び出す各馬。寿々芽、いい位置でレースを進める。最後の直線に入る各馬。
　先頭集団六頭の中にいる寿々芽の馬。
　その前に浩紀の馬がいて、寿々芽の馬の進路を塞ぐ形になっている。
寿々芽「浩紀、前開けてっ！」
　振り返り寿々芽をチラッと見てニヤッと笑う浩紀。譲らない。

寿々芽「なっ……ちょっと前開けなさいよ！　もう足ないでしょあんたの馬！」
　浩紀、無視。前を塞いだまま。
寿々芽「このぉ！　前開けろっってんだ、ソープ狂い！　三人プレイにはまってんのマスコミにばらしてやろうか、変態野郎！」
　ビクッとなる浩紀。進路を開ける。そこへ飛び込む寿々芽の馬。寿々芽、鞭を一振り。加速。馬群から抜け出す寿々芽の馬。そのまま直線一気。
寿々芽「カンパチっ！」
　ゴールイン。寿々芽の勝利。

○同・検量室
　鞍を外し秤に乗って検量を終える寿々芽。握手をしにくる騎手が何人かいる。
　その中の一人、ベテラン騎手の海野穣一（４７）。
穣一「今季初勝利やな」
寿々芽「海野さん。ありがとうございます」
　寿々芽、穣一の手を強く握る。
穣一「けど、レース中の大声は褒められたもんやない。事故にも繋がりかねんぞ」
寿々芽「――すみません」
穣一「ほら、変態くんがおいでなすったで」
　浩紀が騎手たちにいじられながらやってくる。
浩紀「寿々芽ぇ、あれはないやろ」
寿々芽「事実じゃないの」
浩紀「事実って、おまえなあ、レース中やぞ」
寿々芽「レース中に言われて困るんだったら、寮の中でも自慢げに言わなかったらどう？　わたしだって一応女なの。少しは気を遣ってよ」
浩紀「……悪かったよ」
　検量室を出かける寿々芽。
浩紀「待ちぃや」
寿々芽「え？」
　右手をかざす浩紀。
浩紀「コングラチュレーション」

寿々芽、浩紀をじっと見ているが。
寿々芽「サンキュ」
パァン！　ハイタッチ。笑み合う二人。

○回転寿司店【数日後】
カウンターに並んで座っている寿々芽と剛市。カンパチの握り寿司を旨そうに頬張る寿々芽を笑って見ている剛市。

○栗東トレセン・調教コース・調教スタンド前【一か月後】（早朝）
調教を終え、下馬した寿々芽のところへスポーツ新聞記者の浜田（３８）がやってくる。
浜田「グッモーニン。寿々芽ちゃん」
寿々芽「浜田さん」
浜田「調教、これで終わり？」
寿々芽「はい」
浜田「ちょっと話し訊かせてくれへん？」
調教スタンドをコナす浜田。

○同・調教スタンド内の食堂
コーヒーカップを前にして向かい合わせに座っている寿々芽と浜田。
寿々芽「ここまで二勝の騎手に取材することがなにか？」
浜田「掲示板にはよう乗るようになったやん。調子上がってきてるのとちがう？」
寿々芽「おかげさまで――早坂騎手のこと？」
浜田「分かった？」
寿々芽「そりゃまあ」
浜田「関西初お目見えや。明日の追い切りから乗るんやろ。何時に来るん？」
寿々芽「夜の八時って聞いてます」
浜田「えらい遅いんやな」
寿々芽「京都で雑誌の撮影があって、それ終わってからになるって。清水通りとか鴨川べり歩くの撮るって聞きましたけど」
浜田「モデルさんやな。居てる間寿々芽ちゃんの部屋に泊るんやろ」
寿々芽「ええ。さすが『ヒットマン予想』浜田。よくご存じで」

浜田「悩んでるらしいで、姫香ちゃん。憧れの橘川騎手は質問攻めに合うかもしれんなあ」
寿々芽「はぁ？　なんですそれ」
浜田「なんや、知らんのかいな」
　浜田、スマートフォンを取り出し操作。
浜田「デビュー前のうちのインタビュー記事や。『橘川騎手が目標です。いつかいろいろお話を聞いてみたいと思います』――な」
寿々芽「社交辞令ってやつですよ、そんなの」
浜田「そうとも言えんのとちがうか。まだ一つも勝ててないやろ彼女。連に二回絡んだだけや。けど出たらオッズは上がる。典型的な人気先行、客寄せパンダいうやつや。女性騎手の先輩のきみには、訊きたいこと山ほどあるのとちがうかなあ」
寿々芽「――」
浜田「なんか面白いこと訊かれたら、教えてぇや。頼んだで」
　寿々芽の肩をポンと叩き、食堂を出ていく浜田。
寿々芽「パンダとか言うなよな」
　コーヒーを啜る寿々芽。

○同・独身者寮・一階フロア（夜）
　入寮している若手騎手たちが、自室に戻らずそわそわした様子でうろついている。テレビ前のソファに座った寿々芽、呆れ顔。
寿々芽「どいつもこいつも……」
　浩紀が来て寿々芽の横に座る。
浩紀「遅いな、姫香ちゃん」
寿々芽「知らないわよ」
浩紀「かわいいよなあ姫香ちゃん。俺あの子どストライクやねん。なあ、今晩一緒に寝るんやろ。ええなあ。代わってくれへん？」
寿々芽「あんたマジで一回死んだら？」
　フロアの騎手たちが騒めきだす。寮の入口に旅行鞄を持った早坂姫香（２０）が立っている。立ち上がる寿々芽。姫香の前まで行く。礼をする姫香。
姫香「初めまして。早坂姫香です。今日はお世話になります」
寿々芽「初めまして。寮長の橘川寿々芽です。今日はわたしの部屋に泊ってもらうことになります。で、金、土は阪神の調整ルーム。

聞いてるよね」
姫香「はい。橘川騎手が寮長さんなんですね」
寿々芽「そうなの。男連中頼りなくってね、去年から。ここでいいから挨拶しようか。一応礼儀ってことで」
姫香「はい――美浦の町田昭仁厩舎所属、早坂姫香です。今日はこちらでお世話になります。よろしくお願いします！」
深々と頭を下げる姫香。「お願いします」と返答する騎手たち。
寿々芽「ご飯は？」
姫香「ここに来る前に軽く食べてきました」
寿々芽「そう。疲れたでしょ。部屋に行こうか。それともここでみんなと歓談する？」
姫香「いえ、お部屋にお願いします」
寿々芽「うん」
姫香、寿々芽の後をついて行く。浩紀の前を横切る二人。
浩紀「あ、あの、早坂さん」
ギロッと浩紀を見る寿々芽。
寿々芽「ほら、こちら去年の朝日杯勝った天下のＧＩジョッキー。拝んどこうか。ご利益あるかもよ」
浩紀に向かって柏手を打ち頭を下げる寿々芽。姫香を見てニッと笑う。
姫香、寿々芽の真似をして浩紀に向かって柏手を打ち、頭を下げる。
寿々芽「ははははっ」
そのまま去っていく二人を呆然と見送るしかない浩紀。

○同・寿々芽の部屋（夜）
洋間の殺風景な部屋。姫香がジャージ姿で戻ってくる。
姫香「お風呂、ごちそうさまでした」
寿々芽「うん。どうぞ、座って」
姫香「あ、はい」
座卓を挟んで向かい合って座る二人。
寿々芽「狭くて落ち着かなかったでしょ。美浦の独身寮のお風呂はもっと大きいって聞いたことあるけど」
姫香「あ、はい。女性が他に厩務員さん二人と調教助手さん一人がおられるので。たまにみんなでいっしょに入ったり」

寿々芽「いいなあ。なにかと助かるでしょ」
姫香「はい。いろいろ話聞いてもらったり、すごくよくしてもらってます」
寿々芽「羨ましい。ここ入ってからずーっとひとりだよ、わたし」
姫香「でも橘川さん、寮長だなんて凄いです」
寿々芽「騎手会長の命令じゃ断れないよ」
姫香「騎手会長って海野さんの？」
寿々芽「うん。『調教に遅刻したり、休んだりするようなやつらばっかりだからお前やれ』って」
姫香「そうなんだ」
姫香、部屋を見渡し、寿々芽を見る。
寿々芽「ん？」
姫香「夢見てるみたいです、わたし、今」
寿々芽「え？」
姫香「橘川騎手と同じ部屋にいるなんて」
寿々芽「いや、あの、あなた――憧れの騎手がわたしっていうの、あれってほんとに？」
姫香「はい。嘘なんか言いません、わたし」
寿々芽「いや、そりゃ嬉しいけどさ。でもわたし今年で七年目だけど、ようやく通算四十勝だよ。目標はもっと高いところにおかなきゃ。女性騎手だったら、アメリカのリンダ・ウィリアムスとかいるじゃん」
姫香「――わたし、いじめられっ子でした」
寿々芽「え？」
姫香「幼稚園のときから中学卒業までずっと。特に女の子からいじめられてました。友達なんか一人もいなかった。中学のときなんか酷かったですよ。上履きないのなんか毎日。売春してるとか、年寄りの先生とキスしてるの見たとか、変質者の子供妊娠したとか、そんな噂ずっと流されてました」
寿々芽「……やっかみ、だよね」
姫香「トイレに呼び出されてカッターナイフ顔に押し当てられたこともあって。わたし、怖くてそのとき漏らしてしまって。そのままパンツ脱がされて、頭からかぶせられたこともありました」
寿々芽「ひどい……」
●インサート・姫香の回想場面

学校の女子トイレの中、五人の女子生徒に囲まれ、顔にカッターナイフをつきつけらている姫香。怯え、失禁する。（回想場面、終わる）

姫香「死ぬことばっかり考えてた。わたしいじめた子の名前全員ノートに書いて、自殺するんだって」

寿々芽「……」

姫香「中三の夏に、親に頼んで北海道に連れて行ってもらったんです。死ぬ前に一回ラベンダー畑見ておきたくって。夏休み終わったら自殺するって決めてたから」

寿々芽「ラベンダー畑見て気が変わったのね」

首を横に振る姫香。

姫香「きれいでした、ラベンダー畑。あぁ、これでもう思い残すことないって。夏休み終わったら死のうって――で、次の日です。お父さんが札幌競馬場に行こうって言ったんですよ。なんであんなこと言ったんだろ。ギャンブルなんて無縁の人なのに。そこでわたし見ちゃったんですよ」

寿々芽「え、なにを？」

姫香「２レース、マキタジョナサン。４レース、ミナミノサマンサ。８レース、タテノシルヴィア。最終１２レース、ドラゴンネイル」

寿々芽「あなた……」

姫香「はい。わたし見たんです。橘川寿々芽騎手の一日四勝を、この目で」

寿々芽「そう」

姫香「２レース勝たれた後お父さんに『女の人だよ』って教えてもらってビックリして。で、４レース、８レース。もうビックリの連続。その時にはもう橘川騎手の大ファン。で、最終のドラゴンネイルの大逃げですよ。ずーっと絶叫しながら観てました」

●インサート〈札幌競馬場〉

大逃げを打つ寿々芽と騎乗馬ドラゴンネイル。それを見て叫び声を上げている十五歳の姫香。後続を大きく引き離したままゴールインするドラゴンネイル。両拳を突き上げる姫香。

姫香「興奮しすぎて鼻血吹き出しちゃったんですから、ゴールのすぐ後に。涙も止まんなくて。鼻血と涙で顔ぐちゃぐちゃ。でもそんなのどうでもよかった。こんな女の人がいるんだ、こんなかっこいい人になりたいって。死ぬもんか、あんなやつらに負けたま

ま死んでたまるかって。わたしも絶対この人みたいに強くなって、あいつらに勝ってやるんだって」
寿々芽「それで騎手を？」
姫香「はい。それから親に乗馬クラブ通わせてもらって。でも一発合格は無理でした。中三の夏に決めたんですもんね。一浪してるんですよ、わたし」
正座をする姫香。
姫香「だから、わたしが騎手になっているのは――うぅん、わたしが今、生きているのは、橘川騎手のおかげなんです。だから、本当に、ありがとうございます」
頭を下げる姫香。
姫香「ああ、やっと言えた」
寿々芽「足、くずしてよ。そうか――でも、あの一日四勝が騎手人生のピークだよ」
姫香「そんなことないです。今季初勝利の騎乗なんか凄かったじゃないですか」
寿々芽「ああ、あれか。ふふ。こっちでの騎乗は林原オーナーの意向？」
姫香「はい。騎乗予定馬三頭全部、オーナーの持ち馬です」
寿々芽「林原さんのプロメテウスプロモーション、入ったんだよね」
姫香「はい。テレビや雑誌の仕事が来たときに芸能事務所入っていた方が都合がいいからって町田先生が。でも――今日の撮影とかも、正直嫌っていうか」
寿々芽「町田先生の判断は正しいと思うよ。テレビ局の人間絶対ほっておかないもん」
姫香「だけど一勝もあげてない騎手が関西遠征だなんておかしいですよ。そんなの……」
寿々芽「まあ確かに異例だけどさ。あんまり気にしない方がいいよ。乗せてもらえるうちが花なんだからさ――なんか飲む？」
姫香「『一日は缶ビールで締める』ですよね」
寿々芽「え？」
姫香「前にインタビュー記事で読みました」
寿々芽「まいったなあ」
姫香「わたしも寿々芽さんの真似してときどき――あ、寿々芽さんって言っちゃった」

寿々芽「いいよそれで。そっか、二十歳なってんのか」
冷蔵庫から缶ビールを二本取り出す寿々芽。一本を姫香に渡す。
寿々芽「明日に響かない？」
姫香「けっこう強いんですよ、わたし」
寿々芽「意外。よし、じゃあ乾杯だ。このままでいいよね」
栓を開ける二人。
寿々芽「乾杯」
姫香「乾杯」
缶ビールを合わせ、旨そうに飲む二人。
寿々芽「あー、旨い。こっちで初勝利といきたいね――姫香」
姫香の顔がぱっと輝く。
姫香「はい！　寿々芽さん！」
笑顔の寿々芽。

○阪神競馬場・パドック【二日後】
第9レースのパドック。出走各馬が厩務員に曳かれ周回している。待機所から出てくる騎手たち。姫香の姿に観客からどよめきが上がる。少し遅れて寿々芽。姫香の隣に立って。
寿々芽「さあ、本日最初で最後のチャンスだ」
姫香「はい」
寿々芽「逃げるの？」
姫香「はい。そう言われてます」
寿々芽「わたし、逃げ馬に乗る時は特に腹くくってる。当たって砕けろだ、って」
姫香「当たって砕けろ――」
寿々芽「うん」
厩務員に「止まれ」の声がかかる。騎手が騎乗馬のところへ小走りで向かう。

○同・芝コース（第9レース）
ゲートインしている各馬。ゲートが開き各馬一斉に飛び出す。
姫香の騎乗馬が大きく後続を離してレースは進む。
3コーナー手前で集団を抜け出す浩紀の騎乗馬。4コーナー、一気に後続馬が差を詰める。

直線。逃げ続けている姫香の馬。浩紀の馬と並走になりかける。必死の形相で鞭を振るう姫香。
姫香の馬が一馬身抜ける。そのままゴール。歓声が沸き起こる。
その様を最後方で見届ける寿々芽。
寿々芽「やったじゃん」
最下位でゴールする寿々芽の馬。

○同・ウィナーズサークル
インタビューを受けている寿々芽。
姫香「関東に戻っても頑張ります！　また戻って来ますので、今後も応援よろしくお願いします！」
大歓声と拍手が沸き起こる。
インタビューを終えた姫香のところへ寿々芽が来る。向き合う二人。
姫香「当たって砕けろでいきました」
寿々芽「浩紀のキッツイ追い込みにも負けなかった。たいしたもんだよ」
手を差し出す寿々芽。
寿々芽「初勝利おめでとう。わたしも頑張る。いつかＧＩでいっしょに、ね」
姫香「――はい、きっと。約束ですよ」
寿々芽「うん」
握手をする二人。カメラのフラッシュが次々に焚かれる。

（Ｆ・Ｏ）

○京都競馬場併設の調整ルーム・外景（夜）
〈Ｔ〉【二年後】

○同・食堂（夜）
歓談スペースのソファに向かい合って座り、将棋を指している寿々芽と浩紀。
浩紀「負けかけてるのは分かる？」
寿々芽「うるさい」

浩紀「俺もたいがいヘボ将棋やけど、寿々芽よりは上やな――東山の割烹の彼氏とはうまいこといってるん？」
寿々芽「――二か月前に別れた」
浩紀「ありゃま。なんで」
寿々芽「他に好きな女ができたんだって」
浩紀「捨てられてるやん、おまえ」
寿々芽「だまれ――ねぇ、赤ちゃんかわいい？」
浩紀「かわいくないって言う思う？」
寿々芽「うん。だよね」
浩紀「乗り役、まだ続けるんか？」
寿々芽「え」
浩紀「聞いたで。三門先生から調教助手にならへんかって言われてるんやろ。悪い話しやないと思うけど」
浩紀、テーブルの上にあった競馬雑誌を手に取り、ページを繰り、寿々芽の前に投げ出す。
浩紀「『ずっと尊敬してるのは橘川騎手です』――そう言うてもらう値打ちが今のおまえにあるんかいな」
開かれている姫香の顔アップ写真のページ。『ターフのプリンセス・ロングインタビュー』の文字が躍っている。それをじっと見る寿々芽。
浩紀「三年目のここまでで八十五勝。地方も合わせて重賞五勝。たいしたもんや。林原さんがええ馬当てがってるいうのもあるけどな」
寿々芽「……」
浩紀「ルックスだけやない。乗るたび腕上げてるわ。今、逃げ馬に乗せたら東西合わせても五本の指に入るのとちがうか」
浩紀、ピシリと銀を打つ。
浩紀「詰みや。片づけといてや」
立ち上がり食堂を出ていく浩紀。盤上をじっと見つめたままの寿々芽。

○京都競馬場・芝コース【翌日】
最後の直線。一頭大きく遅れてゴールする寿々芽の騎乗馬。
観覧エリアから汚いヤジが飛ぶ。唇を噛みしめる馬上の寿々芽。

○栗東トレセン・三門厩舎【数日後】
　馬房の清掃をしている寿々芽のところへ久和がやってくる。
久和「寿々芽、泰道が来てくれって言うとる」
寿々芽「木本先生が」
久和「ああ――寿々芽よ」
寿々芽「はい」
久和「いつまでも馬乗りしながら厩仕事やってるわけにもいかんやろ。同期でそんなんやってるの、もうおまえだけやろうが。もう潮時とちがうか」
寿々芽「……すみません。木本先生のところへ行ってきます」
　久和の横を過ぎ、馬房を出ていく寿々芽。その背に久和。
久和「ええ攻め馬するよおまえは。いっしょに重賞勝てる馬作ろうや、な」
　一瞬立ち止まる寿々芽。歩いていく。

○同・木本厩舎・マリアラパス馬房前
　寿々芽、泰道、剛市が並んで立っている。馬房の中で、鹿毛馬が背を向けて寝そべっている。
寿々芽「あの、先生」
泰道「マリアラパス。牝馬。二歳。春に入厩した。馬主は林原さんや。ゲート試験はすんなり通ったんやけどな」
剛市「マリアラパス云うのは、ポルトガル語で『おてんば娘』っちゅう意味らしいわ」
泰道「おてんばどころの騒ぎかい。こんな馬知らんで、ほんま」
　のそっと立ち上がるマリアラパス。そのまま馬栓棒に突撃し、三人を威嚇。
寿々芽「うわっ！　なにこいつ！」
剛市「な、手ぇ焼いとるんや、わしも」
　また背を向け寝転がるマリアラパス。
泰道「こいつやってみるか、寿々芽」
寿々芽「え、『やってみる』って？」
剛市「出走できるように調教してくれって言うてはるんや、テキは」
泰道「おまえの先々のことも考えたら、こういうクセ馬に慣れとくのもええやろと思ってな。どうや、やってみんか。アニキには了

解もらえてる」
寝転がったマリアラパスの背中をじっと見つめる寿々芽。
○同・木本厩舎・馬房前【翌日】（早朝）
マリアラパスの曳き運動をしている剛市のところへ寿々芽がやってくる。
寿々芽「おはようございます――ってエビさんどうしたんですか。汗ビショビショじゃないですか」
剛市「どもならんで、ほんま。鞍つけるだけで一苦労なんや、この馬。ほれ、選手交代や。乗り運動頼むわ」
寿々芽「あ、はい」
騎乗する寿々芽。歩かせようとするが動かないマリアラパス。
寿々芽「……なるほどね、そうまでして馬肉になりたいわけね、あんた」
剛市「おい、寿々芽。なに言うてるんや」
寿々芽「『担当馬を人と思って接してる』ってエビさんいつも言ってるでしょ。だからわたしも。まともに装鞍も乗り運動もさせない馬の生末はひとつだね。ご愁傷様」
動き出すマリアラパス。
剛市「おっ」
寿々芽「ははっ。こういういきがってるだけのヤンキー娘は脅すのがいちばんです」
厩舎周りを一周して戻ってくる人馬。マリアラパス止まり、膠着。
寿々芽「……あんたねぇ。五周でしょ。続けなさいよ、ほら」
合図を送るも、無視のマリアラパス。馬房へ戻ろうとする。
寿々芽「ちょっと、帰るつもり！？　止まりなさいよバカ！」
後ろ足で立ち上がるマリアラパス。
寿々芽「うわっ！」
振り落とされる寿々芽。怒りの形相で立ち上がる。
寿々芽「あんた、いいかげんにしなさいよ！――うわっ！」
寿々芽の肩に噛みつくマリアラパス。慌てて曳き手綱を取る剛市。肩を押さえてうずくまる寿々芽。
剛市「寿々芽、大丈夫か！？」
寿々芽「――はい」

歯をむき出し、寿々芽を威嚇するマリアラパス。マリアラパスを睨む寿々芽。
寿々芽「エビさん、わたしこの馬絶対走らせます――よく聞け！　今日からあんたの専属調教助手はわたしだ！　わたしの名前は橘川寿々芽！　覚えときなさい！」
歯を剥く寿々芽。マリアラパスも負けじと。
剛市「前途多難もええとこやな……」
人馬の威嚇合戦が続く。

○同・木本厩舎・マリアラパス馬房【翌日】（早朝）
マリアラパスに装鞍している寿々芽と剛市。
剛市「二人でやったらなんぼか早いな」
寿々芽「隙があったら寝ころぶとか、ありえない」
どうにか装鞍を終える二人。

○同・馬房の前（早朝）
手綱を取り曳き運動を始める寿々芽。素直に歩くマリアラパス。
×　×　×
乗り運動。マリアラパス鞍上の寿々芽。素直に周回を続ける同馬。
寿々芽「なんで？　昨日はあんなに言う事聞かなかったのに」
剛市「気まぐれなんや、とにかく。今日は歩きたい気分なんやろ」
寿々芽「気まぐれ……」
泰道がやって来る。
寿々芽「おはようございます」
泰道「今日は大丈夫そうやな。初日から災難やったな寿々芽」
寿々芽「はい。少し痛みはありますが、なんともないです」
泰道「よっしゃ。そしたら今日はウッドチップコース一周半させてみてくれ」
寿々芽「ペースは」
泰道「好きなように走らせてみてくれ」
寿々芽「好きなように、ですか」
泰道「ああ。好きなようにしか走らんから、この馬。まあ、乗ったらわかるわ」

寿々芽「はあ」

○同・調教コース（早朝）
ウッドチップコースを走るマリアラパス――首を振り物見を繰り返す。ペースを急に落としたかと思えば急加速。また減速。いきなり斜行して大外へ向かっていく。御すことができず、完全に翻弄されている鞍上の寿々芽。

○同・調教スタンド前（早朝）
泰道と剛市の前に戻ってくる人馬。
無言で下馬する寿々芽。
泰道「どうやった」
寿々芽「――なんて答えると思います？」
泰道「……うん」
寿々芽「わたし自分でも攻め馬は上手い方だと思ってるんです。三門先生もそう言ってくれてるし」
泰道「ああ、俺もそう思っとるよ」
寿々芽「全く言う事聞かない馬なんて初めてです。よくゲート試験通りましたね」
泰道「一発や。ここはしっかりやらなアカンっていうのが分かってたみたいやな」
寿々芽「質が悪い……」
泰道「やっぱり、無理か？」
俯く寿々芽。噛まれた左肩に手をやり、マリアラパスを見る。
寿々芽「いえ、やります。いきなり白旗なんて上げてられませんよ」
マリアラパス、まさに『馬耳東風』という風情で立っている。

○同・木本厩舎・マリアラパス馬房内【翌日】（早朝）
馬房内清掃を、剛市といっしょにしている寿々芽。
寿々芽「木本先生が攻め馬するのなんて久しぶりでしょ」
剛市「ああ。クセ馬扱うの昔から上手かったからな。ＧＩ７勝騎手のお手前で少しでも目が変わってくれたらええんやけどな」
調教を終えた泰道がマリアラパスを曳いて戻ってくる。手綱を受け取り、同馬を馬房に入れる寿々芽。
寿々芽「どうでした」

泰道「一週目は普通に走った。けどそこで止まった」
寿々芽「止まったぁ?!」
泰道「ああ。勝手に減速して勝手に止まりよった。コースのど真ん中でや」
●インサート（調教風景）
ウッドチップコースの真ん中で膠着しているマリアラパス。
鞍上の泰道がいくら指示を出しても動かない。
泰道「みんな爆笑してたわ。他人事や思うてから――期限切るわ、もう」
寿々芽「期限」
泰道「ああ。一か月や。入厩して半年。後一か月でまともに走れるようにならんかったら、競走馬登録抹消や。寿々芽」
寿々芽「はい」
泰道「ここまで気性に難のある馬は俺も初めてや。どの調教師でもそう言うやろ。正直無理な気がする。それでもやるか?」
寿々芽「競走馬試験に通ったんですよね」
泰道「ああ、そやからここにおる」
寿々芽「ゲート試験も通ったんですよね」
泰道「ああ、きれいに入ってきれいに出た」
寿々芽「わたし、この馬はただの気性難じゃないんだと思ってます」
泰道「どういうことや」
寿々芽「噛まれて分かりました。甘噛みよりちょっと強め。でも痛みの残る脅しの噛み方。全部分かってやってるんです。相当頭いいですこの馬。人間小馬鹿にして喜んでるんです」
泰道「かもしれんな」
寿々芽「嘗められたまま終われませんよ」
マリアラパスのブラッシングを始める寿々芽。盛大に小便を始める同馬。
寿々芽「女の子でしょ！　はしっこいってやるとかしなさいよ！」
やはり『馬耳東風』のマリアラパス。
○同・調教コース【数日後】（早朝）
芝コースで浩紀騎乗の馬と併せ馬調教をしている寿々芽鞍上のマリアラパス。
浩紀の馬を何度も噛みにいこうとする同馬。避ける浩紀。必

死で制する寿々芽。それでも噛みつきにいこうとするマリアラパス。

○同・調教コース・調教スタンド前（早朝）
下馬する寿々芽と浩紀。寿々芽につめよる浩紀。
浩紀「ボケ！　なんやそのクソ馬！」
寿々芽「ごめん……」
浩紀「ふざけんな！　併せ馬なんか百万年早いわ！」
激怒しながら去っていく浩紀。
寿々芽「クソ馬……」
マリアラパスを睨みつぶやく寿々芽。

○同・木本厩舎・マリアラパス馬房前【数日後】（早朝）
背中を向けて寝ているマリアラパス。
寿々芽が身を乗り出して叫んでいる。
寿々芽「起きろ！　調教の時間だよ！」
反応をみせないマリアラパス。
寿々芽「起きろつってんだバカ馬！」
尻尾を立て、ふるふると二、三度振るマリアラパス。だが、起きない。
寿々芽「んあああっ！」

○同・厩舎から調教コースへの道（早朝）
かなりの速さで疾走するマリアラパス。御せない鞍上の寿々芽。
寿々芽「走るな、バカ野郎～～っ！」

○同・調教コース・調教スタンド前（早朝）
動かないマリアラパス。寿々芽が指示を出しても無視。くるりと向き直り、もと来た道を今度はしずしずと戻り始めるマリアラパス。御せない寿々芽。
寿々芽「バカ野郎……」

○同・木本厩舎・マリアラパス馬房前（夜）
一斗缶を前に置き、パイプ椅子に座っている寿々芽。一斗缶

の上にはビールのロング缶とゆがいたスナップえんどうの
皿が乗っている。背中を向けて寝そべっているマリアラパス。
寿々芽「晃子ママがゆがいてくれたえんどう豆もあんたのお尻見て
食べるとおいしさ半減だわ。それでもわたしは今こうしてる。な
んでだか分かる？」
微動だにしないマリアラパス。
寿々芽「海野さんにあんたのこと相談したんだよ。そしたらさ『馬
には乗ってみよ、人には添うてみよ、乗った馬には添うてもみよ、
や』だって。で、その実践してるってわけ。知ってる、海野穣一。
牝馬ＧＩ十二勝『牝馬のジョー』の助言だよ。ねえ聞いてんの？
ちょっとは反応しなさいよ」
立ち上がり、馬房の前から離れる寿々芽。曇った夜空を見上
げる。
寿々芽「星も見えないか――」
ロング缶をグビリとやる寿々芽。滲む涙を指で拭う。
馬房の前に戻るとマリアラパスが立ち上がっており、一斗缶
のスナップえんどうの皿に向かって首を伸ばしている。
寿々芽「センチメンタルな気分にもさせてくれないのかよ、あんた
は――えんどう豆は大丈夫だったな、確か」
スナップえんどうを掌に置き、マリアラパスの口元に差し出
す寿々芽。食べるマリアラパス。
寿々芽「ねえ、人間小馬鹿にするのもいいけどさ、ちょっとは真面
目に走ろうよ。じゃないとあんた本当に馬肉だよ」
スナップえんどうを食べ終えるマリアラパス。今度は寿々芽
の持っているロング缶に首を伸ばしかける。
寿々芽「ビールを飲もうとするんじゃない！」
慌ててその手を後ろに引く寿々芽。

○同・木本厩舎・馬房前【数日後】（早朝）
マリアラパスの乗り運動をしている寿々芽。やって来た剛市
が声をかける。
剛市「今日はえらい素直やないか」
寿々芽「そういう気分なんじゃないですか」
剛市「ずっとこうやったらええんやけどな」
寿々芽「そんなわけないじゃないですか――正直わたしも自信なく

なってきました」
剛市「そうか……」
乗り運動を続ける人馬。

○同・調教コース（早朝）
ウッドチップコースでマリアラパスを走らせている寿々芽。

○同・調教スタンド前（早朝）
戻ってきた人馬。泰道と剛市の前で下馬する寿々芽。
泰道「無難に回ってきたやないか」
寿々芽「やる気なしモードですね」
泰道「なんやそれ」
寿々芽「素直に反応して、適当に流して走ってお仕事終わり。早く帰って寝たいのわたし、ってやつです。何日か前もありました」
泰道「よう分かってきたやないか、この馬のこと」
寿々芽「そりゃ毎日乗ってれば。他の馬の攻め馬してると感動します。馬ってこんなに言う事聞いてくれるんだ、って」
泰道「それにしてもこいつ、元気なさそうやな」
寿々芽「そういうふりしてるだけなんです。かまってちゃんなところもあるから。ほんと、質が悪い」
剛市に曳かれ馬房に戻っていくマリアラパスを見つめる寿々芽。

○同・木本厩舎・マリアラパス馬房前（夜）
一斗缶を前に座り、ビールを飲んでいる寿々芽。背を向けて寝ているマリアラパス。
寿々芽「どうしたのよあんた。今日はほんとにやる気なしモードだね。夕飼いも残しちゃったし。まあそういうご気分なんでしょうけど――ほら、これなら食べるんでしょ。この前みたいに全部食べないでよね」
スナップえんどうを乗せた掌を馬房の中に差し入れる寿々芽。
マリアラパス、反応をしない。ガフガフと咳き込み始める。
その咳、だんだんと大きくなっていく。
寿々芽「え」
マリアラパス「〈ガフッ…ガフフッ！〉」

寿々芽「ちょ、ちょっと……」
寝返りをうつマリアラパス。両鼻孔から大量の鼻汁が溢れ出ている。激しく咳き込み、苦しげに身をよじる。
寿々芽「うそっ！」
慌ててスマートフォンを取り出す寿々芽。
×　×　×
馬房の中でマリアラパスの診察をしている獣医師を、寿々芽、泰道、剛市が見守っている。出てくる獣医師。
獣医師「感冒。風邪や」
泰道「風邪、ですか」
獣医師「うん。その影響で軽い疝痛おこして便秘にもなってる。静脈注射しといたから。ちょっと熱高いけど、二三日安静にしてたら治るやろ。明日薬持ってくるわ」
泰道「ありがとうございました」
頭を下げる三人。立ち去る獣医師。
剛市「朝に体温計ったときはいつもどおりやったんやけどな。気づいてやれんかった」
寿々芽「わたしのせいです。かまってちゃんだなんて言って……」
泰道「気にするな。ただの風邪や。じきにようなる」
寿々芽「先生」
泰道「ん？」
寿々芽「この馬――マリアラパス、このままちゃんと走れないままだったら、本当に競走馬登録抹消なんですか」
泰道「最後は林原さんの判断になるけどな。なんの利益も生み出さん馬を飼い続けるわけにもいかんやろ。競走馬は経済動物や」
寿々芽「経済動物――」
泰道「ああ。それが現実や」
寝ころんで苦し気に咳き込むマリアラパスをじっと見つめる三人。

○同・木本厩舎・マリアラパス馬房前【翌日】
パイプ椅子に座り、寝ころんでいるマリアラパスを心配げに見ている寿々芽。
そこへやって来る晃子。
晃子「寿々芽ちゃん」

寿々芽「晃子ママ」
晃子「おじや作ってきた。なんか食べんと寿々芽ちゃんが病気になるよ」
寿々芽「ありがとうございます」
土鍋の乗った盆を受け取る寿々芽。
晃子「よっぽど心配なんやねえ」
寿々芽「熱があまり下がってなくって。ボロもしなくって……本当に風邪なのかな」
晃子「風邪よ。獣医さん、そない言わはったんやろ」
寿々芽「そうだけど……」
晃子「風邪ひいた馬はわたしもたくさん見てきたから分かる。今夜が熱のピークとちがうかな」
寿々芽「今夜が」
晃子「情けない顔して。ほら、おじや食べて元気だして。エビとホタテとサーモンの入った特製海鮮おじややで」
寿々芽「すみません、いただきます」
おじやを食べ始める寿々芽。
寿々芽「おいしい……」
晃子「うちの人が寿々芽ちゃん褒めてたよ」
寿々芽「え」
晃子「なんとかしようって必死になってくれてる。あいつの熱意には頭が下がる、言うてね」
寿々芽「……」
晃子「寿々芽ちゃんの気持ち、きっとマリアラパスに通じるよ」
マリアラパスの背中をじっと見つめる寿々芽。

○同・木本厩舎・マリアラパス馬房の前～中（夜）
椅子に座ったままでいる寿々芽。激しく咳き込むマリアラパス。寿々芽立ち上がり馬房の中へ入る。同馬に寄り添って座る。馬体を優しく撫で始める。
寿々芽「苦しい？　晃子ママ『今夜がピーク』って言ってたもんね。薬もちゃんと飲んだし、もうちょっとの辛抱だからね」
首を曲げ、寿々芽を見るマリアラパス。
寿々芽「なによその顔。いつもの元気はどこに行ったのよ――熱で便秘かあ。わたしも風邪ひいたらそうなるよ。いっしょだね」

マリアラパスの腹を優しく撫でさする寿々芽。
寿々芽「ねぇ、わたしもう潮時なのかな。姫香にもずいぶん差をつけられちゃったしさ。いい子だよ姫香。本当にいい子。全然天狗になってないし、態度も変わらない。でも、わたしはあの子に嫉妬してる――ほんと、ちっちゃいよね、わたしって」
ガフガフ咳き込むマリアラパス。寿々芽、腹を撫でさすり続けながら。
寿々芽「馬肉とか言ってごめんね。経済動物なんて、嫌な言葉だよね。あのね。あんた――マリアに乗ってるときにね、『おっ』って思う瞬間があるんだ。あのままずっと走ってくれたらなって、思うんだ。あのままのマリアに乗れたらなって、そう思うんだ」
マリアラパスを愛撫し続ける寿々芽。
× × ×
マリアラパスの体に身をもたせかけ眠っている寿々芽。
× × ×
朝。立っているマリアラパス。身を屈め、眠る寿々芽の顔を嘗める。目覚める寿々芽。
寿々芽「……ん、んぅ？」
マリアラパスの舐りは止まらない。
寿々芽「分かった。分かったからちょっと待ちなよ」
身を起こす寿々芽。マリアラパスの顔を手挟み、その双眸を見る。
寿々芽「熱、下がったんだね。よかった」
顔を寿々芽の胸になすりつけるマリアラパス。
寿々芽「なに急に甘えてんのよ。あれだけ好き放題してきてさ」
盛大に脱糞するマリアラパス。
寿々芽「ボロ、出た……って言うかほんとにセンチメンタルな気分にさせてくれないのねあんたってば！　女の子でしょ！」
マリアラパスの首を強く抱きしめる寿々芽。

○同・調教コース【数日後】（早朝）
ウッドチップコースでマリアラパスの調教をしている寿々芽。
寿々芽「ほうっ！　マリア！　ほほうっ！」
呼吸の合った人馬の疾走。

○同・調教コース・調教スタンド前（早朝）
　下馬する寿々芽。泰道、剛市と向き合う。
泰道「ようやってくれた」
寿々芽「ありがとうございます」
泰道「怪我の功名ならぬ風邪の功名のところもあったけどな」
寿々芽「はい、ですね」
泰道「この馬の能力、どう思ってる？」
寿々芽「まだまだ粗削りです。ようやく言う事聞くようになったんですから。でも、その分伸びしろは大いにあると思います」
泰道「うん。俺はな、この馬は重賞勝てる力は十分持ってると思う」
寿々芽「重賞、ですか」
泰道「その力を今寿々芽が引き出しかけてるんや。三週間後の新馬戦、乗ってみるか」
寿々芽「え、わたしで、いいんですか」
泰道「林原さんには言うとく。断ることはないやろ。連にでも来たらおまえのお手馬や。けど下手うったら替えるぞ。ええな」
寿々芽「はいっ！　ありがとうございます！」
剛市「よかったな、寿々芽」
寿々芽「はい！」
泰道「レースに行ったら思い切って逃げてみろ。この馬に小細工はいらんやろ」
寿々芽「逃げ、ですか」
泰道「そうや」
寿々芽「分かりました」
　マリアラパスの顔を手挟む寿々芽。
寿々芽「いい、マリア。ぶっぱなすよ」
　寿々芽をじっとみつめるマリアラパス。

○同・厩舎集合地区【三週間後】（早朝）
　昇っていく朝日に照らされる厩舎群。

○同・木本厩舎・マリアラパス馬房前
　マリアラパスと対峙している寿々芽。
寿々芽「いよいよだ。上々の追い切り。文句なく仕上がったよ。自分で分かってるよね」

寿々芽の言葉をじっと聞いているマリアラパス。
寿々芽「わたしはマリアを信じてる。だからマリアもわたしを信じて」
姫香「作戦会議中失礼しま～す」
振り向く寿々芽。姫香が微笑んで立っている。
寿々芽「え――あ、そっか。姫香ジュベナイルフィリーズ乗るのか」
姫香「はい。お久しぶりです。こちらが噂のマリアちゃんですね」
マリアラパスの前に並んで立つ二人。
寿々芽「そう。栗東最強のヤンキー娘。ほらマリア、挨拶しな」
姫香の差し出した手に鼻づらを寄せるマリアラパス。
寿々芽「ちょっとなにあんた！　わたしの初対面のときとえらく違うじゃない！」
寿々芽に歯を剥くマリアラパス。
寿々芽「なっ……このっ！」
負けじと歯を剥く寿々芽。その様を見てクククっと笑う姫香。
姫香「息ぴったり。寿々芽さんはすごいなあ」
寿々芽「え？　なにがよ」
姫香「全然言う事聞かなかったんでしょ、この馬。でもちゃんとデビューさせちゃうんだもん。寿々芽さんはやっぱりすごい」
寿々芽「――初ＧＩ獲れそう？」
姫香「いやぁ、正直……もちろん精一杯乗りますけど、アルヌールさんの馬が抜けてます。岩川さんと舘さんの馬も強いです。ちょっと付け入る隙がなさそうです」
寿々芽「そっか」
姫香「でも、よかった」
寿々芽「え、なにが」
姫香「だって寿々芽さん、前に会ったときより、ずっと生き生きしてるから」
寿々芽「そう？」
姫香「はい。運命の出会い果たしたんじゃないですか、マリアちゃんと」
寿々芽「姫香がＧＩ乗る日にわたしはマリアと新馬戦なんだな」
姫香「わたし、忘れてませんよ、あの約束」
寿々芽「――うん」

○阪神競馬場・芝コース
〈T〉１２月　阪神５R・新馬戦・一八〇〇ｍ（芝・良）
ゲートインしているマリアラパス。
寿々芽「さあ、いくよ」
ゲートが開く。マリアラパス、好スタート。そのまま先頭に立ち、後続を離しにかかる。単騎で逃げるその姿にどよめきが起きる。
三コーナーで二番手以下の馬と十馬身以上の大差。いっそう大きくなるどよめき。
寿々芽「騒いでんじゃないわよ！」
最後の直線に入っても脚色は衰えない。
軽く鞭を入れる寿々芽。ラストスパート。二番手以下を大きく引き離したまま、マリアラパス、一着でゴールイン。
小さくガッツポーズをする寿々芽。

○同・検量室前
検量を終えて出てきた寿々芽を泰道が迎える。
泰道「ようやった。見事な逃げ切りや」
寿々芽「はい。マリアがちゃんと応えてくれました」
泰道「そうやな。訂正する。マリアラパスの能力はＧＩ級や」
寿々芽「ＧＩ……」
泰道「これからも頼む」
手を差し出す泰道。
寿々芽「はいっ！」
強く泰道の手を握る寿々芽。

○京都競馬場・芝コース
〈T〉１月　京都競馬場９R　白梅賞・芝一六〇〇ｍ（芝・稍重）
逃げているマリアラパス。大きく離された後続馬群の中の一頭に騎乗している浩紀。
浩紀「あのクソ馬ぁ～～」
悠々とゴールするマリアラパス。

○京都競馬場・芝コース

〈T〉2月　京都10R　エルフィンステークス・一六〇〇m（芝・良）
逃げているマリアラパス。離れた後続馬群の中の一頭に騎乗している浩紀。
浩紀「ははは……あかん、次元が違う」
楽々とゴールするマリアラパス。

○栗東トレセン・調教スタンド内・食堂【数日後】
うどんを食べている寿々芽の前に浜田がやって来て座る。
浜田「絶好調やないの」
寿々芽「おかげさまで」
浜田「三歳牝馬戦線の話題、マリアラパスが独占やなあ」
スポーツ紙を差し出す浜田。
浜田「今日のうちの関東版。競馬面見てみ」
箸を置き、スポーツ紙を開く寿々芽。
競馬面に大きく〈姫香、マリアラパス強奪宣言!?「一番強い馬に乗りたい!」〉と掲載されている。
寿々芽「え……」
浜田「おてんば娘に乗るプリンセス。絵になる光景ではあるよなあ」
紙面をじっと見つめる寿々芽。そのときスマートフォンが鳴る。取り出す寿々芽。姫香からである。電話に出る寿々芽。
寿々芽「はい、もしもし」
姫香（声）「〈もしもし、寿々芽さん。おはようございます〉」
寿々芽「おはよう姫香。どうした」
●〈画面二分割。電話でやりとりする二人の顔のアップ〉
姫香「あの、こっちのニッポウスポーツに載ってて、ネットのニュースにもなってたから。あの、あの、わたし――」
寿々芽「優しい記者さんに教えてもらって、ちょうど記事読んでたところなの」
姫香「そうなんですか。違うんです。わたし、そんなこと言ってないんです。聞いてもらえますか。聞いてほしいんです」
寿々芽「うん。聞くよ」
姫香「記者の人から『マリアラパスに乗ってみたいと思う?』って訊かれたんです。だからわたし『あんな能力の高い三歳馬、騎手だったら誰でも乗りたいって言うと思います』って言っただけな

んです。その後わたし言ったんです。『でもあの馬は寿々芽さんがすごく時間かけて苦労して、ちゃんと走るように調教した馬だから、だれにも乗る権利なんかない』って。でも、そこは全然載せてもらえてなくって……」
寿々芽「そっか。うん。分かった。もうなんも言わなくていいよ」
姫香「わたし、新聞読んでびっくりして。強奪とか、そんなのわたし、言ってない……あんなの、ひどい。ひどいです……」
●〈画面二分割終了。姫香の顔、消える〉
寿々芽「こらぁ泣くな。大丈夫、分かったから。わざわざ電話ありがとうね。うん、うん。分かったってば。なに謝ってんの。今度こっちきたらご飯行こうよ。うん、うん。じゃあね。ありがとうね。うん。じゃあね」
電話を切る寿々芽。またうどんを食べ始める。
浜田「姫香ちゃん？」
寿々芽「ええ」
浜田「なんて？」
新聞を突き返し、浜田を睨む寿々芽。
寿々芽「あのさあ、こんなこと書いてるからマスゴミなんて言われるんじゃない？　分かってんのほんとに」
浜田「キツイなあ」
寿々芽「女の戦い無理やり仕立て上げて商売にしようなんて、おたくの新聞も相当性根が腐ってますよね」
浜田「キッツイなあ。さすがケンカスズメ」
寿々芽「そのあだ名最初につけてくれたのもおたくの新聞でしたよね」
仏頂面でうどんを食べ続ける寿々芽を苦笑して見ている浜田。
○前同・木本厩舎・マリアラパス馬房前【二週間後】（夜）
パイプ椅子に座り、一斗缶を前にしている寿々芽。マリアラパスが顔を向けて寝そべっている。
寿々芽「分かるマリア。ノンアルだよ」
ノンアルコールビールの缶をマリアラパスに見せる寿々芽。
寿々芽「初の重賞騎乗だもんね。気合の現れってやつよ」
ビール缶を一斗缶の上に置き、立ち上がる寿々芽。

○前同・馬房の中（夜）
馬房に入る寿々芽。寝そべったままのマリアラパスの背に跨ろうとするが、動きを止める。
服を脱いでいく寿々芽。全裸になる。
寿々芽「同じだよ」
マリアラパスの背に跨り、上半身を馬体に横たえる寿々芽。
寿々芽「また二人でぶっちぎろうね。そんで四戦無敗で桜花賞だ。ＧＩだよ。舘さんいるよ。柴野さんも岩川さんも海野さんもいる。関東の岡本さんも横道さんもいる。アルヌールもクレマンもいる。浩紀は、いない。へへへ――姫香もいる。ジュベナイルフィリーズ四着になった林原さんの馬で出てくるよ。やっと約束果たせるんだよ」
マリアラパスの耳に口を寄せる寿々芽。
寿々芽「勝ちたいんだ、姫香に。あの子に勝ちたい。姫香より先にＧＩ獲りたい――愛してる。だれにも渡さない」
マリアラパスの首を優しく抱きしめる寿々芽。じっと動かないマリアラパス。

○阪神競馬場・芝コース
〈Ｔ〉３月阪神１１Ｒチューリップ賞（ＧⅡ）一六〇〇ｍ（芝・良）
スタート前地点。輪乗りをしている出走各馬。
穣一「寿々芽」
寿々芽「はい」
穣一「ええ馬に逢うたな」
寿々芽「――はい」
× × ×
ゲートインしている各馬。ゲートが開き全馬飛び出す。ハナを切るマリアラパス。いつものような単騎の逃げ――と思いきや、穣一の馬が後を追う。一馬身半の差を保って追走し続ける穣一。
寿々芽、チラッと後ろを振り返る。ニヤッと笑う穣一。
穣一「逃げ馬は寿々芽の馬だけやないぞ！」
そのまま三コーナーにかかる。穣一の馬が半馬身まで迫る。
寿々芽「海野さん！」

穣一「ああ？！」
寿々芽「強い逃げ馬はこの馬だけです！」
鞭を入れる寿々芽。マリアラパスが伸びる。一気の加速。穣一の馬を置き去りにするマリアラパス。
穣一「あっちゃー……言うてくれるなあ」
一着でゴールインするマリアラパス。
×　×　×
レース後。コース上での勝利馬の口取り式。手綱を取っている笑顔の林原（５５）。鞍上の寿々芽に声をかける。
林原「ここまで走るとは思わなかったなあ、この馬。よくやってくれたね橘川くん」
寿々芽「はい。ありがとうございます」
林原「桜花賞も期待していいね」
寿々芽「はい！」
笑顔で写真に収まる二人。

○栗東トレセン・木本厩舎・マリアラパス馬房前【一週間後】
マリアラパスの顔を撫でている寿々芽。
寿々芽「いよいよだよマリア。桜花賞、クラシックだよ。一番人気もらえるかもよ。すごいところまで来たよね。夢じゃないんだもんね――」
泰道「寿々芽」
寿々芽が振り返ると泰道が立っている。
寿々芽「先生」
真剣な表情の泰道。
泰道「事務所まで来てくれ」
寿々芽「はい？」

○同・木本厩舎・事務所
机を挟んで向かい合ってソファに座っている寿々芽と泰道。
うつむいている泰道、無言。
寿々芽「あの、先生」
泰道「寿々芽、あきらめてくれ」
寿々芽「え」
泰道「桜花賞、おまえをマリアラパスに乗せることはできん」

寿々芽「――――乗り替わり、ですか」
泰道「ああ」
寿々芽「あの、わたし、なにかミスしたでしょうか」
泰道「いいや。おまえはなにもミスなんかしてない。マリアラパスがここまで来られたのは、だれよりもおまえのおかげや」
寿々芽「じゃあ、なんで」
泰道「俺はマリアラパスにはずっと寿々芽に乗ってもらうつもりやった。けど、力が及ばんかった」
寿々芽「どういうことですか」
泰道「林原さんが、早坂をな」
寿々芽「え――」
泰道「早坂をマリアラパスにどうしても乗せたい、言うてな。チューリップ賞の日の夜から言うてきてな」
寿々芽「いやだっ！」
立ち上がる寿々芽。
寿々芽「なんで、なんで姫香が！　そんなのおかしい！　舘さんや海野さんなら納得する！　悔しいけど無理やり納得する！　でも替わるのが姫香なんて、そんなの……そんなの絶対納得できない！」
泰道「落ち着け、寿々芽」
寿々芽「わたし、あの子に負けてる。それは認めます。でも、マリアと出会って変わったんです。先生だって、それは分かってるはずです」
泰道「ああ」
寿々芽「わたしは、わたしはマリアといっしょにＧＩ勝つんだ！　桜花賞勝つんだ！」
泰道「すまん」
寿々芽「なんで……なんで断ってくれなかったんですかっ！」
泰道「断った！　この一週間毎日林原さんから電話や！　そのたび断ってきた！　俺かてマリアにはおまえを乗せたい！　あの馬の力をいちばん引き出せる乗り役はおまえや！　俺がいちばん分かってる！」
寿々芽「じゃあ、じゃあ、なんで」
泰道「――替えんと転厩させる言われたらどうしようもないやろ」
寿々芽「転厩……」

泰道「ああ。脅しやない。十年ほど前や。持ち馬のローテーションが気に食わんから転厩させたことがあるんや、林原さんは」
俯いている泰道をじっと見つめている寿々芽。やがて立ち上がり、事務所を出ていく。

○同・路上
茫然自失の体で歩く寿々芽。

○同・木本厩舎・マリアラパス馬房前
マリアラパスと対峙する寿々芽。その双眸を見つめる。その顔を手挟む。寿々芽の目から涙が溢れ、零れ落ちていく。泣き出す寿々芽。
寿々芽「あっ、あぁっ……あぁぁ……うぁっ、んあぁっ……あぁぁっ」
やがて地面に突っ伏す寿々芽。
寿々芽「あぁ〜〜っ……んあぁぁっ……」
泣き続ける寿々芽。拳で地面を叩く。
寿々芽「なんで、なんでぇっ……桜花賞、マリアと、わたしのマリアと……」
泣きじゃくる寿々芽をじっと見つめるマリアラパス。泰道がやって来る。号泣する寿々芽に声をかけることができず、無言で立っている。
寿々芽「あぁっ……んぁぁっ……乗るんだ、桜花賞、マリアに乗るんだぁ……」
寿々芽の悲痛な泣き声が厩舎集合地区に響いていく。

○同・調教コース【三週間後】（早朝）
ウッドチップコースで追い切り調教中のマリアラパス。鞍上は姫香。

○同・調教コース・調教スタンド前（早朝）
戻ってくる人馬。泰道と剛市が待っている。下馬する姫香。言葉を交わす三人。マリアラパスを曳いて帰っていく剛市。泰道も後に続く。
姫香も歩きだそうとするが、そこに寿々芽がやって来る。

姫香「寿々芽さん……」
対峙する二人。
姫香「あの、わたし……」
手を前にやり、制する寿々芽。
寿々芽「マリアラパス。三歳牝馬。脚質大逃げ。気性難は聡明さの裏返し。ここまで四連勝と絶好調を保つ。以上引き継ぎ終わり」
姫香に背中を向け、立ち去ろうとする寿々芽。立ち止まり振り返る。
寿々芽「ねぇ早坂さん。インタビューや取材でわたしの名前出すの、もうやめてね。嫌みにしか思えなくって、気分悪いんだ」
立ち去る寿々芽。遠ざかるその背をじっと見つめている姫香。

○同・三門厩舎・馬房【三日後・桜花賞当日】
馬房の掃除をしている寿々芽。久和がやって来る。
久和「始まるぞ。事務所にはだれもいてへん」
立ち去る久和。掃除を続ける寿々芽。

○同・三門厩舎・事務所内
テレビの前に立つ寿々芽。画面には桜花賞の中継が映されている。
本馬場入場後、返し馬をするマリアラパスと鞍上の姫香が映る。
実況アナウンサー「〈話題を呼んだ乗り替わりは勝負がかりの現れだ！　大逃げ炸裂でＪＲＡ史上初の女性ＧＩジョッキー誕生となるか！　僅差の二番人気、マリアラパス！　その鞍上は早坂姫香！〉」
画面をじっと見ている寿々芽。
×　×　×
桜花賞スタート。飛び出すマリアラパス。三馬身ほどの差を保つ逃げ。無言で画面を見つめ続ける寿々芽。
最後の直線。じりじり差をつめられるマリアラパス。二頭の馬に追いつかれ、追い抜かれる。
寿々芽「ほ～ら、やっぱり。最初から行ききらないから。ははっ」
三着でゴールインするマリアラパス。
床に座り込む寿々芽。

寿々芽「あはっ、あはははは っ」
笑いながら泣く寿々芽。

○阪神競馬場・芝コース【一か月後】
騎乗馬とゲートに入っている寿々芽。スタート。一コーナー手前でバランスを崩し落馬する寿々芽。
寿々芽「……うっ、ううっ」
足首を押さえ、苦悶する寿々芽。

○△△病院・外景【一週間後】
晃子が入っていく。

○同・病室
四人部屋。入院している寿々芽。左足をギプスで固定した状態で、上半身を起こしてベッドに横になっている。入ってくる晃子。
晃子「お久しぶり、寿々芽ちゃん」
寿々芽「晃子ママ」
晃子「お見舞い遅くなってごめんね。クッキー焼いてきたんよ。でも捻挫で済んでよかったね。不幸中の幸いや」
寿々芽「はぁ、まあ」
ベッド脇の椅子に座る晃子。
晃子「痩せたんやない？　病院のごはん、ちゃんと食べてるのん？」
寿々芽「……」
晃子「この前、わたしうちの人とお兄やんにブチ切れてしもうたん。二人がね『他馬との接触もなしに落馬するのは、気が抜けてるからや』なんて寿々芽ちゃんのこと話ししてたからね。もう腹たって腹たって『あんな理不尽な乗り替わりされたらだれかて気も抜けて落馬のひとつもするわ！　アホか！』言うてね。二人ともなにも言い返せへんかった」
寿々芽「はは……先生たちの言うとおりです」
晃子「けど、調教に遅刻するのや出てきぃひんのはやっぱりあかんよ、寿々芽ちゃん」
寿々芽「……」
晃子「――今日のオークス、見ぃひんの？」

寿々芽「勝ちますから」
晃子「え」
寿々芽「マリア、オークス勝ちます。鞍上も桜花賞で分かったはずです、マリアの乗り方。府中の直線は、マリアにとって最高の舞台です――桜花賞だって、わたしが乗ってたら勝ってました。今日のオークスももちろん。で、夏超えて、ローズステークス叩いて秋華賞――牝馬三冠だったんです、マリアは。その背中に乗ってたのはわたし」
晃子「寿々芽ちゃん……」
寿々芽「でも夢だったんですよね。全部、夢」
薄く笑う寿々芽。

○東京競馬場・芝コース
オークス。最後の直線。二番手以下を大きく引き離して逃げているマリアラパス。そのままゴールイン。
× × ×
満場の「姫香」コールの中のウイニングラン。
× × ×
口取り式。林原が満面の笑顔で手綱を取っている。凛々しい顔の姫香。
〈T〉オークス　マリアラパス優勝。早坂姫香、ＪＲＡ史上初の女性ＧＩ勝利騎手となる。

○祇園のホストクラブ【一か月後】（夜）
その外景。

○同・中（夜）
ホストたちに囲まれ、酒を飲んでいる寿々芽。へべれけではしゃぐその姿。

○同・店外（夜）
ホストたちに大きく両手を振り、店を出る寿々芽。よろよろと歩き出す。

○四条通（夜）
舗道をおぼつかない足取りで歩いていく寿々芽。
○河原町・バス停のベンチ（夜）
ベンチに腰かける寿々芽。うなだれ、えづきだし――嘔吐する。涎と鼻水が垂れる。涙がぼたぼた落ち続ける。
○京都☆☆ホテル・外景【一か月後】（夜）
○同・大広間（夜）
姫香のオークス優勝祝賀会が行われている。立食パーティー形式。大勢の参加者で賑わっている。
その中に寿々芽もいる。壁際に佇み、水割りのグラスを傾けている。近寄っていく剛市。
剛市「来てたんか」
寿々芽「来ちゃいけないわけでも？」
剛市「足、ようなったんやろ。調教には来い」
寿々芽「最近思うんですよ。やっぱりあのとき、わがまま言って、エビさんに回らないお寿司屋さんに連れていってもらっとけばよかったって」
剛市「……待っとる」
寿々芽の前から去る剛市。
×　×　×
参加者を前に、マイクの前に立つ姫香。
サマードレスを纏った美しいその姿。
姫香「本日は暑い中ご参加いただきありがとうございます。東京に続き、ここ京都でも優勝祝賀会を開いていただけることを、心より嬉しく思います。これからも一鞍一鞍、大切に乗っていきます。秋華賞も勝てるよう頑張りますので、応援のほどよろしくお願いいたします」
深く礼をする姫香。拍手が沸き起こり、そこここでフラッシュが焚かれる。姫香をじっと見ている寿々芽。
×　×　×
壁際の寿々芽の前に来る姫香。
姫香「寿々芽さん……」

寿々芽「招待状、ありがとう」
姫香「迷いました……でも、マリアラパスは、寿々芽さんが一生懸命――」
無表情で姫香を見つめる寿々芽。ただじっと見つめ続ける。
寿々芽「強奪宣言、本当だったね早坂さん」
姫香「……」
そこへやって来る林原。
林原「橘川騎手じゃないですか。あなたのことは気になっていたんだ。よく来てくれた。いや度量が大きい。アスリートの鑑だ、あなたは」
寿々芽「こちらこそまたお会い出来て嬉しいです。記念に握手していただけますか」
林原「もちろん」
手を差し出す林原。寿々芽も右手を出すが――その瞬間、左手に持ったグラスの水割りを林原の顔にぶちまける。
寿々芽「ゲス野郎」
静まり返る会場。しばしの間の後、どよめきが広がる。カメラのフラッシュが焚かれる。スマホを向けている参加者もいる。
泰道「寿々芽っ！　なにやってんのや！」
寿々芽「あぁっ！　なんだよ！」
泰道を殺気だった目で睨む寿々芽。
林原「元気がいいお嬢さんだ」
余裕ある笑みを浮かべ、ハンカチで顔を拭く林原。
グラスを床に落とし、会場を立ち去ろうとする寿々芽。その背に向かい姫香。
姫香「言わないわよ！　あなたが憧れだなんてもう絶対言わない！　最低！　そんなことしか言えないの！　こんなことしかできないの！　マリアラパスはわたしの騎乗馬だ！　秋華賞も獲る！　エリ女だってわたしが乗って獲る！」
立ち止まる寿々芽。
姫香「悔しかったら奪い返してみてよ」
寿々芽「――もうどうだっていいんだよ」
会場を出ていく寿々芽。

○栗東トレセン・調教スタンド内・食堂の厨房【十日後】
営業時間外の薄暗い厨房の中。パイプ椅子に座り、向かい合っている寿々芽と穣一。
穣一「処分が下りた。一年間の謹慎や」
寿々芽「謹慎――引退勧告じゃなくてですか」
穣一「ああ。そういう声も馬主会であがったらしいけどな。林原さんも不問にするって言うてくれてる。一年かけて頭冷やせっていうことや」
寿々芽「あの、わたし、辞めます」
穣一「簡単に言うよなあ」
寿々芽「引退届、書いています。明日にでも提出――」
穣一「ふざけるな！　ひとりで生きてるつもりかおまえは！」
穣一の剣幕に驚く寿々芽。
穣一「三門先生も木本先生も、この十日間、どれだけ走り回ってくれたって思ってるのや！　二人して林原さんに土下座したいう話しやぞ！」
寿々芽「土下座……」
穣一「俺かてＪＲＡの理事長のところに頭下げて頼みに行ったんや。無駄にしてくれんなよ」
寿々芽に〈大里育成牧場〉のパンフレットを差し出す穣一。
穣一「ほれ。おまえの謹慎先や」
パンフレットに目を落とす寿々芽。
穣一「俺が初めて重賞勝った馬の育成牧場や。二代目の場長となんやしらん気が合うてな。家族ぐるみの付き合いしてる」
パンフレットから目を上げ、穣一を見る寿々芽。
穣一「寮もある。飯つき風呂つき寝床つきや。けど給料はないぞ。謹慎中の身やからな、おまえは。理事長にも了解もらった。明日にでも正式な通達がくるはずや」
寿々芽「あの、海野さん。なんでわたしなんかのためにここまで――」
穣一「寿々芽。俺に颯希っていう中学生の娘がいてるの知ってるやろ。保育園の頃から騎手になるのが夢でな。いよいよ競馬学校受けさせんと仕方ないとこまできてしもうた。この前颯希に言われたわ。『これで寿々芽さんが騎手辞めたりしたら、それは騎手会長のくせに寿々芽さんを守られへんかったお父さんのせいや！』い

うて。ほんま、口ばっかり一人前になりよってから」
寿々芽「……」
穣一「あいつの部屋の壁、おまえと早坂の雑誌や新聞の切り抜きでいっぱいや。俺はな、おまえら二人は競馬界の宝やと思ってる。マリアラパスに出会って掴んだものがあるんやろ、ん？」
再びパンフレットに目を落とす寿々芽。
穣一「電話番号書いてあるやろ。ちゃんと電話しとけよ」
立ち上がる穣一。
穣一「向こうに行ったら日記をつけろ。それを元にして二週間に一回、手書きの報告書を俺宛に送ってこい。ええな」
厨房を出ていく穣一。立ち上がる寿々芽。穣一の背に深々と頭を下げる。

○同・調教コースへと向かう道【数日後】（早朝）
マリアラパスが調教助手を背に、調教コースへと向かっている。旅装の寿々芽が、遠ざかるその姿を見つめている。
踵を返す寿々芽。歩き出す。

○北海道・大里育成牧場・放牧地【九月】（早暁）
大きな放牧地の前に看板が出ている。
白み始める空。鳴きかわす鳥の声。
寿々芽が歩いてくる。そのシルエット。

○大里育成牧場での寿々芽の様子
〈午前中〉
●育成馬に飼葉を与えている寿々芽。
●育成馬にブラッシングをする寿々芽。
●育成馬を放牧地に連れて行く寿々芽。
●空になった馬房を掃除する寿々芽。
●調教コース。他のスタッフと共に育成馬の馴致をする寿々芽。
×　×　×
〈正午すぎ〉
放牧地の中。育成馬が草を食んだり寝たりしている中、おにぎりとお茶の昼食を摂っている寿々芽。

食べ終え、寝転がる。抜けるような青空を見上げ、目をつむる寿々芽。

×　　×　　×

〈午後〉

●調教コース。再び育成馬の馴致をしている寿々芽。

●スタッフと共に育成馬を収牧している寿々芽。

●馬房で育成馬に夕飼いをつけている寿々芽。

●仕事を終え馬房を出る寿々芽。

○同・本棟・二階家屋部・ダイニングキッチン（夜）

夕飯を食べている大里一家。場長の大里正純（47）、妻の仁美（35）、双子の娘、伽耶（4）と沙耶（4）。娘たちの間に寿々芽が座っている。

正純「ほれ、いけ寿々芽。それとも水割りのほうがいいか」

瓶ビールを寿々芽に差し出す正純。

仁美「あなた」

正純「ははははは」

寿々芽「……すみません、いただきます」

受ける寿々芽。半分ほどを飲む。

仁美「よかったねパパ。晩酌相手ができて」

正純「ああ」

寿々芽「あの、いつもすみません。お邪魔だったら言ってください。寮の方で食べますから」

仁美「誘ってるのはこっちなのに、なに変なこと言ってるの。伽耶、沙耶、寿々芽ちゃんのこと邪魔？」

伽耶・沙耶「ぜんぜん！」

伽耶「パパが寿々芽ちゃんのこと邪魔って言ってるの！？」

沙耶「そんなの言うパパ大嫌い！」

正純「とんだとばっちりじゃねえか。パパは寿々芽ちゃんのこと大好きだよ」

伽耶「じゃあママが！？」

仁美「なんでよ。ママも寿々芽ちゃんのこと大好きよ」

伽耶「よかった！　伽耶も寿々芽ちゃんのこと大好き！」

沙耶「沙耶も大、大、大好き！」

正純「子供にこれだけ好かれてるのは寿々芽の人間がまっすぐな証

拠だ。まっすぐすぎて林原に水割りぶっかけたわけだが」
寿々芽「……」
仁美「もう、いいかげんにしてよ」
正純「いいじゃねえかよ。俺は大拍手だよ。昔から気に入らん、あの林原って馬主は。テキのローテに口挟むは、転厩させるは。それで今回の乗り替わりだ。デカい顔しすぎなんだよ。寿々芽がしたことは褒められたことじゃない。けどな、あれで溜飲下がった競馬関係者、山ほどいるんだ」
仁美「この人、海野さんからお話あったとき、二つ返事でオッケーしたんだから」
寿々芽「……でも、やっぱり、後悔してます」
正純「ん？」
寿々芽「自分が惨めになっただけだし。それに、姫香のお祝いの席を、あんな形でむちゃくちゃにしてしまって……あの子の言う通り、わたし最低なことをしました」
うつむく寿々芽。
伽耶「泣いてるの寿々芽ちゃん」
沙耶「泣いちゃだめだよ。寿々芽ちゃん泣いたら沙耶も泣きたくなっちゃうよ」
伽耶「伽耶もだよ――そうだ、いいこと思いついた！　寿々芽ちゃん今日うちでお泊りしなよ！　だって保育園のお泊り会ってすごく楽しいもん！　元気出るよ！」
沙耶「そうだよ！　伽耶頭いいね！　ねえ、いいよねママ！」
仁美「大きなお布団敷いてあげるから、三人でいっしょに寝なさい」
伽耶・沙耶「やったー！」
正純「二人とも寿々芽に泊まってほしいだけじゃないかよ。すまんな、ガキのわがまま聞いてやってくれるか」
寿々芽「はい」
伽耶「やったー、寿々芽ちゃんとお泊りだー！」
沙耶「やった、やったー！」
寿々芽の手を握る伽耶と沙耶。小さなその手を握り返す寿々芽。

○同・本棟外景（夜）
夜が更けていく。

○秋華賞・ゴールシーン
逃げ切って勝つマリアラパス。
〈T〉秋華賞　マリアラパス優勝

○エリザベス女王杯・ゴールシーン
逃げ切って勝つマリアラパス。
〈T〉エリザベス女王杯　マリアラパス優勝

○新聞記事
マリアラパスの最優秀三歳牝馬受賞を伝える記事。同じ紙面に〈鞍上、姫香は特別表彰！〉と大きく載っている。

○大里育成牧場・放牧地前【春】
馬運車がやって来る。待っている大里一家とスタッフ。寿々芽もいる。
馬運車が停まり、競走馬スペースの扉が開かれ、架け橋が渡される。その上を牧場スタッフに曳かれ、ゆっくりと降りてくる栗毛馬。地に降り立つ。
正純「レナーテ。うちの育成馬。栗東の桃谷厩舎所属の四歳牝馬。期限を決めん放牧だ」
寿々芽「桃谷先生のところの――たしか追い切りのときに骨折した馬がいたんじゃ」
正純「それだよ。デビューから二連勝。三戦目前の追い切り中に予後不良レベルの骨折。馬主のたっての願いで延命することになってな、手術して歩けるまでになった。右前脚にボルトが入ってる。それで折れた骨を繋いでる」
寿々芽「ボルト、ですか」
正純「ああ。競争能力は回復しているそうだ。けど、目いっぱい走ることを怖がっているみたいでな」
レナーテをじっと見つめる寿々芽。タクシーがやって来て停まる。初老の男と少女が降りる。
×　×　×
放牧地に佇むレナーテ。柵に手をかけ、レナーテをじっと見ている少女、朝倉美途（14）。その後ろ姿を見ている寿々芽

のところへレナーテの馬主、朝倉寛一（６１）が近づいていく。

寛一「橘川さん」

振り向く寿々芽。

寛一「初めまして。レナーテの馬主の朝倉です」

寿々芽「初めまして。橘川です」

寛一「（美途を見て）姪の美途です。わたしが引き取って育てています。二年前に両親を交通事故で亡くしましてね」

寿々芽「――そうですか」

寛一「末の弟夫婦です。あの子は一人娘でね。追い切りに連れていったんです。あの馬の走りを見せてやりたくてね――親の葬儀のときも気丈にふるまって泣かなかったあの子が『殺しちゃやだ！殺しちゃやだ！』って馬運車の中で馬体にすがりついてね」

寿々芽「……」

寛一「わたしが二十年で持った馬は八頭。今持っているのはあの馬だけです」

寿々芽「繁殖に上げるとかは？」

寛一「もちろん考えました。でもあの子に、美途にレナーテの走る姿をもう一度見せてやりたくてね――橘川さん。あなたをすがってやってきました。マリアラパスを手の内に入れたあなたの力で、レナーテを再び走れるようにしてやってくれませんか」

美途の後ろ姿を見つめる寿々芽。

寛一「使いだしは早かったんです、あの馬。見事な追い込み勝ちで二連勝。デビュー戦と二戦目、違う新人騎手を乗せてね」

振り返る美途。寿々芽を見る。寿々芽も美途をじっと見る。

○同・調教コース【翌日】

調教コースを走るレナーテ。鞍上は寿々芽。

○同・放牧地

他馬といっしょに放牧されているレナーテ。一頭ポツンと佇む同馬を柵の向こうから見ている寿々芽。正純がやって来て、寿々芽の横に立つ。

正純「どうだ、レナーテは」

寿々芽「はい。しっかり馬銜（ハミ）を取って走ってくれません。

常に五分の力で走っている感じです」
正純「そうか。やっぱり走ることを怖がってる感じか？」
寿々芽「はい――それと」
正純「ん、なにか気づいたことがあるのか？」
寿々芽「ボルトが入ってるんです。繊細なタイプの馬だから、違和感があるんじゃないでしょうか。それが少しでも解消されたら、あるいは」
正純「違和感か。性格は？」
寿々芽「素直で従順です。追っても応えてくれないところ以外は。クラスでいちばんおとなしい女の子ってところですかね」
正純「なるほどな」
レナーテを見る二人。

○同・レナーテの馬房前
馬房の中のレナーテ。その前に立っている寿々芽。
寿々芽「姪のためだとか言ってさ。結局馬主のエゴじゃない――走りたい、あんた？」
見つめあう人馬。

○同・本棟前【数日後】
正純の運転する車が本棟前に止まる。
降車する正純に続き、助手席から青年が降りる。そこへ一輪車を押してやってくる作業中の寿々芽。
正純「寿々芽。ちょうどよかった。装蹄師の千堂駿太くんや」
寿々芽と向かい合う千堂駿太（２３）。
正純「彼はすごいぞ。去年の全国装蹄師大会でぶっちぎりの優勝。今年になって開業した。寿々芽の言う違和感ってやつが少しでも解消されんかと思ってな」
駿太を見る寿々芽。分かるかどうかの会釈をする駿太。

○同・削蹄場
釘節刀（ちょうせつとう）を使い、レナーテの蹄鉄を外す駿太。外した蹄鉄をためつすがめつして、ふっと笑う。
駿太「こんなテツを履いてる限り、この馬は全力で走らないね。ボルトが入ってるんだよね、右前足に」

正純「ああ」
駿太「脚――って言うか体そのものにテツが合っていないんだ。ボルトが入ってこの馬の脚はそれまでと別物になった。歩様も変わったはずだ。なのに蹄にだけ合わせたテツを打ってもなんの意味もない。全体を見なくっちゃ。それくらいのことは分かっててほしいなあ」
寿々芽「えらそうに言ってるけど、その意味あるテツっての打てるの、あなた？」
正純「こら、寿々芽」
寿々芽「だってこの人、さっきから」
寿々芽を睨む駿太。
駿太「俺はな、六つのときから爺ちゃんに付いてテツ打ってきた」
寿々芽「六つ……」
駿太「ずっとテツばっかり打ってた。高校も行ってない。爺ちゃんは俺になにも教えなかった。見て全部覚えた。爺ちゃんが死んだ今は、俺が日本――世界でいちばんの装蹄師だ。俺の手は、爺ちゃんの手だ」
駿太の気迫に言葉が出ない寿々芽。
正純「寿々芽、彼に任せてみようや」
屈みこみ、レナーテの右前脚を慎重に触る駿太。
×　×　×
レナーテの削蹄をする駿太。削蹄剪鉗（さくていせんかん）を使い、大胆かつ繊細に蹄を削っていく。その様をじっと見ている寿々芽、伽耶、沙耶。
伽耶「痛くないのかな……」
沙耶「うん……」
寿々芽「二人ともママに爪を切ってもらうでしょ。あれと同じよ」
寿々芽をチラッとみる駿太。
寿々芽「なに？　女子供に見られてたら世界一の腕は鈍っちゃう？」
ふふっと笑う駿太。
×　×　×
鍛冶台を前にして蹄鉄を打つ駿太。
×　×　×
蹄鉄をレナーテの蹄に押し当てる駿太。ジュワッっと音がして煙が上がる。

伽耶・沙耶「うわっ！」
二人を見て微笑む駿太。
駿太「魔法を使ってるから熱くないんだ」
寿々芽「――嘘教えてんじゃないわよ」
×　×　×
出来上がった蹄鉄をレナーテの蹄に釘で打ち付ける駿太。仕上げを終え、右前脚の装蹄を終える。寿々芽を見て。
駿太「四本全部終わるまで見てるつもり？」
頷く寿々芽。伽耶と沙耶も頷く。駿太苦笑して、左前脚の装蹄に移る。
×　×　×
装蹄作業を終えた駿太。大里一家が見守る中、手綱を取ってレナーテを歩かせる寿々芽。数歩歩き、足元を見る。落ち着かないその素振り。
寿々芽「とまどってる」
正純「え」
寿々芽「今までと違う感じに驚いてます――伽耶ちゃん、沙耶ちゃん。このお兄ちゃん、本当に魔法使いなのかもしれないわ」
真顔でコクコク何度も頷く伽耶と沙耶。
駿太「今日は歩かせるだけにして、テツに慣れさせた方がいいと思うよ」
正純「分かった。調教は明日からにするよ。本当にありがとう」
駿太「仕事だから――あとどうなるかは、乗る人間の力次第なんじゃないの」
寿々芽を見る駿太。
寿々芽「言ってくれるわよね、ほんと」
駿太「やばい、言いすぎるとなにされるか分かんない」
寿々芽「あなたねぇ！」
駿太「ははははっ」

○同・調教コース【翌日】
レナーテの調教をしている寿々芽。

○同・本棟前
正純が待っている。戻ってくるレナーテと寿々芽。下馬する

寿々芽。
正純「どうだった？」
寿々芽「しっかり馬銜を取って、指示通り八分の力で走ってくれました。ゴーサイン出してれば、目いっぱいでもいけました」
正純「そうか、うん」
レナーテの足元を見る寿々芽。

○同・調教コース【数日後】
寿々芽を乗せ、併せ馬で走っているレナーテ。その様子を見守っている寛一と美途。

○同・放牧地前
併せ馬を終えたレナーテを、寛一、美途の前へ誘導し、下馬する寿々芽。
寛一「ありがとう、橘川さん」
寿々芽「いえ、わたしはなにも。美途ちゃん」
寿々芽を見る美途。
寿々芽「わたし場長にレナーテのこと『クラスでいちばん目立たない女の子』って言ったことがあるの。でも今はそれに付け加えることがある。彼女はクラスでいちばんガッツのある子だった。思い切り走りたくってうずうずしてる。大きな骨折したのにね、すごい馬だよ」
頷き、レナーテの顔を撫でる美途。
寿々芽「乗ってみる？」
美途「え」
寿々芽「レナーテなら大丈夫」
頷く美途。美途を補助し、レナーテに乗せる寿々芽。
美途「こんなに高いんだ」
寿々芽「怖い？」
美途「少し――でも、きれい。これが寿々芽さんがいつも見てる景色なんだ」
寿々芽「うん、そうだよ」
寛一「あと二週間で謹慎も明けますね」
寿々芽「あ、はい」
寛一「栗東でも頼みましたよ、レナーテ」

寿々芽「え」
寛一「桃谷調教師には、レナーテの主戦騎手をあなたにしてほしいとの要望を伝えてあります。彼が了承されたら、わたしからあなたを降ろすことはありません」
美途「わたしも、レナーテには寿々芽さんに乗ってほしい」
レナーテを見る寿々芽。人馬が見つめあって。

○同・放牧地前【二週間後】
車が止まっている。大里一家、牧場スタッフが揃っており、旅装の寿々芽がその前に立っている。
寿々芽「本当にお世話になりました。みなさんのことは、一生忘れません」
仁美「体には気をつけるのよ。お酒も飲みすぎないようにね」
寿々芽「はい。奥さんもお元気で」
グズグズ泣いている沙耶。
伽耶「ダメだよ、沙耶。泣かないって約束したでしょ」
沙耶「でも、でも……」
伽耶「泣いちゃダメだってば……」
伽耶も泣き出す。歩み寄って屈み、二人を抱きしめる寿々芽。
寿々芽「伽耶ちゃん、沙耶ちゃん。ありがとうね。またきっと遊びに来るからね――そうだ、最後にいいこと教えてあげようか」
伽耶・沙耶「なに」
寿々芽「この前さ、また魔法使いのお兄ちゃん来て、レナーテの足に魔法かけたでしょ」
伽耶・沙耶「うん」
寿々芽「あのときね、わたし魔法使いから好きだって告白されちゃった。恋人になってほしいって」
伽耶・沙耶「えぇっ！」
寿々芽「わたしのこと考えると、夜寝られなくなるんだってさぁ」
伽耶「なんて返事したの？」
寿々芽「ん～、まだ考え中。どうしたらいいと思う？」
沙耶「『うん』って言っちゃえばいいと思う」
伽耶「そうだよ。だって魔法使いの恋人なんてすごいよ！」
寿々芽「あはは。そっか。うん、分かった。まだだれにも秘密だよ」
人差し指を唇に当てる寿々芽。まねをする伽耶と沙耶。立ち

上がる寿々芽。
正純「じゃあ、そろそろ行こうか」
寿々芽「はい」
運転席に入る正純に続いて、寿々芽が助手席に乗り込む。発進する車。
助手席のウィンドウが開く。身を乗り出して振り返り、手を振る寿々芽。
寿々芽「さようならー、ありがとうー」
見送るだれもが手を振っている。
寿々芽「奥さーん、伽耶ちゃーん、沙耶ちゃーん。みんなー。大好きー。遊びに来るからー。きっとまた来るからー。さようならー、さようならー」
見送るだれもの姿が見えなくなるまで、大きく手を振り続ける寿々芽。

○栗東市内の焼肉店【一週間後】（夜）
暖簾が出ている。

○同・店内（夜）
座敷席に座っている寿々芽。隣に久和。向かい合っている泰道。その隣の桃谷旭延（53）
旭延「『あぁっ！　なんだよ！』ちゅうてか。わははは」
寿々芽「桃谷先生……」
旭延「ヤスも形無しやったなあ。ほれ、飲め、寿々芽」
寿々芽「――いただきます」
旭延のビールを受ける寿々芽。
旭延「久和よ。おまえももうちょっと気合入れて寿々芽にええ馬乗せたらんかい」
久和「はぁ。不徳の致すところで……」
旭延「寿々芽、レナーテの評価をしてみろ。返答次第によってはヤネの話はなしや」
旭延をじっと見る寿々芽。
寿々芽「――脚質は差し追い込み。追ってからキレのある脚が使えます。距離の融通はききますが、最適性距離は二千から二千四百くらいかと。性格は従順で我慢強い。相当の潜在能力を持ってい

ると思います」
旭延「『相当』？　曖昧なこと言いなや」
寿々芽「――ケガがなければ桜花賞でマリアと勝負できてました。
　ＧＩ級です」
旭延「よし、合格。わしな、あの馬骨折した後しばらくまともに寝
　られへんかった。三戦目のヤネ、アルヌールに頼んでたんやで。
　けど腹決めた。今日からレナーテの主戦はおまえや。しかし林原
　か。因縁やなあ」
寿々芽「え、因縁って？」
旭延「あいつに転厩いてこまされたのはわしや――アルカディアナ
　イトは大事に使っていかんとあかん馬やったんや。結果見てみぃ、
　レース中に骨折、予後不良や」
寿々芽「そうだったんですか」
旭延「ええか寿々芽、マリアラパスが立ちふさがっとるぞ。あの馬
　は今や現役最強牝馬や。エリ女も連覇するやろ。な、ヤス」
泰道「――待ってる」
寿々芽「はい」
　正座をする寿々芽。
寿々芽「三門先生、木本先生、桃谷先生。本当にありがとうござい
　ます。こんなわたしのために、ありがとうございます――」
　頭を下げる寿々芽。
旭延「よっしゃ、食おうや。寿々芽、肉置いていけ。近江牛や。旨
　いぞぉ。ジンギスカンに慣れた舌がびっくりするぞぉ」
寿々芽「はぁ！？　先生ジンギスカン馬鹿にしてるとか？　信じら
　れない！」
旭延「おー怖い。ビールぶっかけんなや」
寿々芽「……そんなのばっかり」
　爆笑する三人。寿々芽も笑う。

○エリザベス女王杯・ゴールシーン
　逃げ切り勝ちを決めるマリアラパス。
　〈Ｔ〉マリアラパス、エリザベス女王杯優勝。二連覇達成

○阪神競馬場・芝コース
　〈Ｔ〉１２月　阪神１０Ｒ　猪名川特別・一四〇〇ｍ（芝・

良）
スタート地点で輪乗りをしている出走各馬。レナーテ鞍上の寿々芽。
穣一「寿々芽」
寿々芽「はい」
穣一「おまえの報告書、読むの楽しみやったで。ええ土産持って帰ってきたな」
寿々芽「――はい。ありがとうございます」
浩紀「海野さん、土産いうのは人にあげるもんやないですか。なあ、アル」
アルヌール（３０）流暢な日本語の関西弁で。
アルヌール「ほんまやで。骨折してなかったら、それボクの馬やないの。腹立つなあ。水割りかけたろか」
寿々芽「……そういうの、ほんとにもういいですから」
騎手たちがどっと沸く。
×　×　×
レース。鮮やかな追い込み勝ちを決めるレナーテ。

○京都競馬場・芝コース
〈T〉一月　京都１１R　京都金杯GⅢ・一六〇〇ｍ（芝・稍重）
三着でゴールインするレナーテ。

○京都競馬場・芝コース
〈T〉二月　京都１１R　京都牝馬特別GⅢ・一四〇〇ｍ（芝・稍重）
三着でゴールインするレナーテ。

○阪神競馬場・芝コース
〈T〉四月　阪神１１R　阪神牝馬ステークスGⅡ　一六〇〇ｍ（芝・良）
三着でゴールインするレナーテ。

○栗東トレセン・桃谷厩舎・レナーテ馬房前【一週間後】
馬房にいるレナーテの前に立っている寿々芽と旭延。

旭延「距離が足らんかったいうのもあるんやけど、追い込んで届かんのう」
寿々芽「最後いい脚は使ってくれてます。あとひと踏ん張りできれば」
旭延「疲れもちょっと出てるみたいやし、ええ空気吸わせたるか」
寿々芽「放牧ですか」
旭延「ああ」
寿々芽「だって。みんなによろしくね、レナ」
レナーテの鼻づらを撫でる寿々芽。

○京都競馬場・芝コース【二週間後】
ゲートインしている寿々芽と騎乗馬。
ゲートが開く。いきなり後ろ脚で立つ寿々芽の馬。
寿々芽「うわっ！」
その後の激しい斜行。御せない寿々芽。
隣の穣一騎乗馬の進路を妨害する格好になる寿々芽の騎乗馬。
× × ×
三着で入線する穣一の馬。最下位入線の寿々芽が後方からやってくる。
寿々芽「海野さん、すみませんっ」
穣一「気にするな。不可抗力や。ああなったら俺だって御せん」
寿々芽「でも……」
穣一「けど裁決はそう見てくれんぞ。二日食らう覚悟しとけよ」
寿々芽「はい――」
穣一「レナーテは放牧中か」
寿々芽「え、そうですが」
穣一「おまえも行って来たらどうや、北海道」
寿々芽「え」
穣一「騎乗停止にならんと、骨休めもできひんところまで来たか。おまえも」
寿々芽を見てニヤッと笑う穣一。
審議を伝える場内アナウンスが響き始める。

○大里育成牧場・放牧地前【二週間後】
正純の車が止まる。助手席から降りる寿々芽。伽耶と沙耶が

駆けてくる。寿々芽も走り出す。
伽耶・沙耶「寿々芽ちゃーんっ！」
寿々芽「伽耶ちゃーん！　沙耶ちゃーん！」
その様を本棟から出てきた仁美が微笑んで見ている。

○同・放牧地
寝ころんでいる寿々芽。両脇に伽耶と沙耶。少し横にレナーテが寝ている。
伽耶「この前来たよ、魔法使い。馬の脚にいっぱい魔法かけてった」
寿々芽「そう。レナーテの脚にも魔法かけにくるんだよ。飛行機に乗ってね」
沙耶「えー、魔法使いなのにホウキに乗って空飛べないの？」
寿々芽「あー、そういうのはダメ。あいつの魔法は馬限定だから」
伽耶「魔法使いの恋人ってどんな気分？」
寿々芽「ん？　まあ人間といっしょだよ」
伽耶「エンキョリレンアイなんだよね、寿々芽ちゃんと魔法使いって」
寿々芽「なんでそんな言葉知ってんの？」
伽耶「だってママが言ってたもん。ねー」
沙耶「ねー」
寿々芽「ふふ、そっか。でもさぁ、あいつあんな偉そうな物言いしてたくせにさぁ――くくくっ。ぶはははは」
伽耶・沙耶「なに、なに？」
寿々芽「だめー、教えなーい。二人がもっと大人になってから～」
伽耶「やだー、そんなの」
沙耶「教えてよー、寿々芽ちゃーん」
寿々芽「だめー。ママに怒られちゃうよ～ん」
二人を抱きよせる寿々芽。戯れる三人をレナーテがじっと見ている。

○ヴィクトリアマイル・ゴールシーン
最後の直線、後続を引き離しゴールインするマリアラパス。
〈T〉マリアラパス、ヴィクトリアマイル優勝

○大里育成牧場・事務所

ソファに座り、テレビに映し出される姫香の優勝インタビューを観ている寿々芽と仁美。
仁美「勝っちゃったね、ヴィクトリアマイル」
寿々芽「はい」
仁美「彼女に謝りには？」
寿々芽「海野さん通じて打診してもらったんですけど、断られました」
仁美「そっか――前にさ、あのこと後悔してるって言ったよね」
寿々芽「はい」
仁美「でも、あれがあったから寿々芽ちゃんはここに来た。そしてレナーテに会えた」
寿々芽「……」
仁美「あれがあったから、わたしたちは寿々芽ちゃんに会えた」
インタビューに答える姫香をじっと見つめる寿々芽。

○阪神競馬場・芝コース
〈T〉六月　阪神・マーメイドステークスGⅢ　二〇〇〇m（芝・良）
追い込みで勝利を決めるレナーテ。

○同・検量室前
旭延とがっちり握手をする寿々芽。

○札幌競馬場・芝コース
〈T〉七月　札幌・クイーンステークスGⅢ　一八〇〇m（芝・良）
またも追い込みで勝利するレナーテ。
×　×　×
レナーテの口取り。ゼッケンを広げている寿々芽。厩舎関係者が揃い、寛一、美途、伽耶、沙耶が手綱を握っている。正純、仁美、駿太もいる。笑顔の誰も。
寿々芽「美途ちゃん、乗馬教室通い始めたんだってね」
美途「はい。あの、寿々芽さん」
寿々芽「なに」
美途「――やっぱり、ちゃんと受かってから報告します」

寿々芽「え？」
寿々芽を見て強く頷く美途。

○京都競馬場・芝コース
〈T〉十月　京都・京都大賞典GⅡ　二四〇〇ｍ（芝・不良）
雨中のレース。最後の直線、三頭がデッドヒートを繰り広げている。その後ろから一気にやってくるレナーテ。鞭を入れる寿々芽。瞬時に加速。大外から前三頭にぐんぐん迫っていく。二頭を抜く。だが勝ち馬に一馬身届かず。
僅差の二着でレースを終えたレナーテの鞍上で首を傾げる寿々芽。

○栗東トレセン・三門厩舎・馬房【一週間後】
馬房の清掃をしている寿々芽。
晃子「寿々芽ちゃん」
振り返る寿々芽。晃子が微笑んで立っている。

○同・木本厩舎への道
並んで歩く寿々芽と晃子。
晃子「ちーっとも遊びに来てくれへんのやもん。お菓子もあんまり作らへんようになってしもた。久々に腕ふるってチョコレートケーキ作ったんよ。食べてくれる？」
寿々芽「はい、ありがとうございます」
晃子「寄ってく？　マリアのところ」
寿々芽「え？」
晃子「近寄らんようにしてたんやろ、おいで」
馬房の中に入っていく晃子。しばらくそこに立っているが――入っていく寿々芽。

○同・木本厩舎・マリアラパス馬房前
マリアラパスの前に立つ寿々芽。
晃子「先、事務所行ってるから。エビさんもいてるよ。ちゃんと来るんやで」
寿々芽「はい」
馬房を出ていく晃子。マリアラパスの双眸をじっと見る寿々

芽。マリアラパスも寿々芽から目を逸らさない。
寿々芽「久しぶりだね」
人馬の見つめあいがしばらく続く。
寿々芽、左の片肌を脱ぐ。
寿々芽「ほら、マリアに噛まれた跡。ずっと残ってるんだよ」
マリアラパス、首を伸ばし寿々芽の肩に残る自身の噛み跡を嘗め始める。
優しくマリアラパスの首を抱きしめる寿々芽。寿々芽の肩に顔を寄せ、噛み後を嘗め続けるマリアラパス。
寿々芽の目から涙が一粒、頬を伝って落ちていく。

○栗東トレセン・インタビュールーム【一か月後】
共同インタビューを受けている姫香。
記者A「女王杯三連覇が懸かる今の気持ちをお聞かせください」
姫香「そうですね。とくにそれは意識せず、普段通りの走りを心掛けたいです」
記者A「そうすれば結果はついてくると？」
姫香「はい。確信しています」
小さなどよめきがおきる。
記者B「ヴィクトリアマイル以降レースを使っていませんがそれについては？」
姫香「全く心配していません。ここ一本に絞って調整も順調です」
記者C「マリアラパス一強とみられていましたが、ここにきてレナーテが対抗馬として浮上しました。それについては？」
姫香「今のマリアラパスにとって、相手どうこうは関係ありません」
浜田「レナーテ鞍上は因縁の橘川寿々芽騎手ですが、そのことについては？」
浜田をじっと見る姫香。
姫香「他の質問をお願いします」
× × ×
共同インタビューを受けている寿々芽。
記者A「大一番を前にした今の気持ちは？」
寿々芽「その前に、まずこの場をお借りして、二年前にわたしがとった社会人としてあるまじき行為についてお詫びを申し上げます。とりわけ、寛大なご処置をいただきました馬主の林原様には改め

て謝罪と感謝の意を伝えたいと思います。また、お祝いの席をわたしの愚かな行為で台無しにしてしまった早坂姫香騎手にも、改めてお詫び申し上げ――」
浜田「あー、もうそんなんええから」
浜田を見る寿々芽。他の記者の視線が浜田に集まる。
浜田「寿々芽ちゃん、きみ復帰してからそんなんばっかり言うてるやん。もう分かったって。ほら、マスゴミになんか言うてみいや。一言一句そのまんま書いたるから。本命はマリアラパス。その対抗馬レナーテに乗る心境は？　はい、どうぞ！」
寿々芽「――全身全霊で勝ちにいきます。マリアラパスに女王杯三連覇はさせません」
大きなどよめきが上がる。
浜田「相手は逃げ馬、あなたが乗るのは追い込み馬。作戦は？」
寿々芽「はぁ？　そんなのあったって今ここで言えるわけないでしょ！　ふざけたこと訊いてんじゃないわよ！」
浜田「はい、いただきました！　ケンカスズメが戻ってきたでぇ～～」
笑いに包まれるインタビュールーム。しまった、という顔の寿々芽。

○京都競馬場・芝コース【エリザベス女王杯当日】
冒頭部に戻って。出走前。
●マリアラパス、返し馬の様子。
●レナーテ、返し馬の様子。

○同・スタート地点
ゲート前での出走馬の輪乗りが始まる。
ゼッケン番号1、マリアラパスと鞍上、白色帽の姫香を見る寿々芽。姫香、その視線に気づく。姫香もゼッケン番号１８のレナーテと桃色帽の寿々芽を見る。二人、どちらからともなく視線を外して。輪乗りが続く。
×　×　×
スターターが壇上に登る。歓声。
関西ＧＩのファンファーレが鳴り響く。
ファンファーレ終わり、この日いちばんの大歓声。その後の

騒めき。
〈T〉十一月　京都・エリザベス女王杯ＧⅠ　二二〇〇ｍ（芝・良）
ゲートイン。スムーズに進んでいく。
最内にマリアラパス。
大外にレナーテ。
刹那の静寂。ゲートが開く。

○同・エリザベス女王杯・レースの様子
一気に沸く歓声。出走全１８頭が飛び出していく。揃ったきれいなスタート。
最内からマリアラパスがスタートダッシュを決め、逃げに入る。
一コーナーを前に早くも二番手の馬と六馬身のリードを取るマリアラパス。
一コーナーを過ぎるマリアラパス。悠々と逃げていく。
中団から抜ける一頭、レナーテ。
寿々芽が軽く鞭を一つ。マリアラパスを追い始めるレナーテ。
どよめきがおこり、それは歓声へと変わっていく。
二コーナーを過ぎるマリアラパス。続いてレナーテも。
振り返る姫香。やがて二頭の馬体が合う。並走になる。内がマリアラパス、外がレナーテ。大歓声。
向こう正面を二頭が後続十六頭を大きく離して駆けていく。
並走する二頭。一瞬、寿々芽を見る姫香。一瞬、姫香を見る寿々芽。
一騎打ちの様相を呈したレースに場内は興奮と熱狂の坩堝と化す。
三コーナーへと坂を上っていく二頭。
後続とは十馬身の差。
淀の坂、その頂点。一騎打ち。
坂を下っていく二頭。そのまま四コーナーへと突き進んでいく。
四コーナーを回り最後の直線へ。
内、マリアラパスと姫香。外、レナーテと寿々芽。
直線。残り三百メートルを切る。わずかにマリアラパスが出

る。レナーテが追いすがる。また轡が並ぶ。
残り二百メートルを切る。
姫香「うあぁぁっ！」
激しく鞭を振るう姫香。
マリアラパスが出る。一馬身出る。
残り百メートル。一馬身半の差がつく。
そのとき――寿々芽、大きく鞭を振り上げる。渾身の鞭を振り下ろす。
馬銜を強く取るレナーテ。一気の加速。
マリアラパスを並ぶ間もなく抜き去るレナーテ。
レナーテが一着でゴールを駆け抜ける。一馬身差でマリアラパス。
大歓声の京都競馬場。やがて沸き起こる万雷の拍手。いつまでもなりやまない拍手の中、ウイニングランをする寿々芽とレナーテ。

○同・検量室
検量を終えた寿々芽。騎手たちから握手攻めにあっている。
検量を終えた姫香が寿々芽の前に立つ。対峙する二人。
姫香「最初から競りかけてくるなんて思ってなかった」
寿々芽「前走終わってから決めた。普通に追い込んでもマリアを差せないって思ったから」
姫香「最後、競り落としたつもりだったけど、違った。あれは前に行かされただけ、そうでしょ？」
寿々芽「レナの勝負根性に賭けた」
姫香「当たって砕けろ、か――」
寿々芽「あれしかなかった。あなたとマリアに勝つには、あれしか」
俯く姫香。そのまま顔を上げない。
姫香「やっぱり『あなた』とか言うんだ。追い切りのときとパーティーのときは『早坂さん』だった」
寿々芽「……」
姫香「どれだけ悲しかったかも知らないでさ」
歩み寄る寿々芽。姫香の零す涙がぽとぽと床に落ちていく。
姫香の両肩に手を置く寿々芽。
姫香「どれだけ嬉しかったかも知らないでさ」

寿々芽「ごめんね姫香。ひどいこと言ったね。ひどいことしたね。
オークス、秋華賞、ヴィクトリアマイル、エリ女連覇。おめでとう。すごいよ。姫香は本当にすごい」
姫香「わたしは言わない。おめでとうなんて言わない。絶対わたしのほうが辛かった。どんな気持ちでマリアに乗ってきたか分かってんの？　ねぇ。分かってんの？」
姫香を抱きしめる寿々芽。
寿々芽「うん、うん。ごめんね」
姫香「わたしの方が辛かったんだからぁ」
寿々芽「そうだね、姫香の方が辛かったよね」
泣きじゃくる姫香を抱きしめ続ける寿々芽。
姫香「名前、呼んでよ。悪かったって思うなら、もっと名前呼んでよ。わたし、クソ姫とか、姫カスとか言われてたんだからぁ。ずっと言われてたんだからぁ。本当に、本当に死ぬつもりだったんだからぁ」
寿々芽「うん、うん。姫香、姫香」
姫香「もっと呼んでよぉ」
寿々芽「姫香！　姫香！　姫香！」
泣き続ける姫香を強く抱きしめる寿々芽。二人を写すカメラのフラッシュがそこここで光る。

○栗東トレセン・四階スタンド内【二月】（早朝）
調教コースが一望できる四階スタンド。久和と泰道が調教の様子を見守っている。異なる学校の制服を着た二人の少女を連れて穣一がやってくる。一人は美途である。
穣一「おはようございます」
久和と泰道、振り返って。
久和「なんや穣、別嬪さん二人もつれて」
泰道「きみ、颯希ちゃんか？」
頷く少女、穣一の娘の海野颯希（１５）。
颯希「はい。お久しぶりです」
泰道「大きいなったなあ。そうか、競馬学校受かったんやったな。
穣、親子鷹やな」
穣一「なにを。因果な事ですわ。嫁が泣いて泣いてねぇ」
久和「そっちの子は、朝倉オーナーの姪御さんやな」

美途「はい。朝倉美途です。わたしも競馬学校に入学します。よろしくお願いします」
穣一「二人が一回追い切り見たい言うから連れてきたんです」
久和「ええ日に来たな。もうちょっとしたら始まるで。『ターフのプリンセス』と『ケンカスズメ』の併せ馬が」
颯希・美途「えぇっ！」
泰道「きさらぎ賞の追い切りに早坂がこっちに来てるんや。ライディーンボーイ。皐月賞十分狙える馬やから気合い入ってるわ。ついでに新馬の攻め馬頼んだら、心よう受けてくれてな。寿々芽も併せたい新馬いてるいうから、それでな」
穣一「ベランダに出て見てこい」
颯希「うん！　行こ！」
美途「うん！」
　顔を輝かせベランダへと駆け出す二人。
泰道「最近の子供は仲ようなるの早いなあ」
穣一「仲ようなってからいろいろあるヤツらもいますけどね」
　笑う三人。
久和「先週の騎乗終わってすぐに北海道飛んで死ぬほど飲み食いしてきたらしいぞ、あの二人。減量大丈夫かいな」

○同・ベランダ（早朝）
　手すりに寄りかかっている颯希と美途。
　調教コースを指さす颯希。
颯希「あ、あれっ！」
美途「来たっ！」
　ウッドチップコースを併せ馬で二頭が走っている。

○同・調教コース（早朝）
　並走している寿々芽と姫香の乗る新馬。
　寿々芽、姫香を見る。姫香、寿々芽を見る。一瞬微笑み合う二人。
　二人、また真っ直ぐ進路を見て。
姫香「ほうっ！」
寿々芽「ほほうっ！」

○同・ベランダに戻って（早朝）

上気している颯希と美途の頬。憧れと希望に満ち溢れた二人の瞳、その視線の追いかける先――。

曙光の中、姫香と寿々芽の騎乗馬が疾走していく。ただひたすらに、駆けていく。

（了）

「駒は乙女に頬染めさせて」執筆にあたり参考としたウェブサイト。

○ＪＲＡ公式ホームページより

・「騎手の一日」
・「栗東トレーニングセンター」
・「美浦トレーニングセンター」
・「騎手に迫る：競馬学校」
・「厩務員過程の一日：競馬学校」
・「レーシングカレンダー　２０１９年　２０２０年」
・「日高育成牧場」
・「育成牧場とは　日高育成牧場」

○ウィキペディアより

・「中央競馬」の項
・「パドック」の項
・「競馬学校」の項
・「調教助手」の項
・「騎乗停止」の項
・「馬主」の項
・「全国装蹄競技大会」の項
・「フランス語の姓」の項 b
・「レナトゥス」の項
・「藤田菜七子」の項
・「福永守」の項
・「シリウスシンボリ」の項

・「ヤマニングローバル」の項
・「クイーンズリング」の項
・「アドマイヤグルーヴ」の項
・「ヌーヴォレコルト」の項

○YOUTUBE
・福永祐一＆藤田菜七子　調整ルーム
・競走馬育成牧場
・栗東トレーニングセンターの施設と調教コース
・鉄さんの馬房掃除講座
・新馬調教

○Umasより
・サラブレッドの一生　誕生からレースまで
・馬の蹄鉄はどうやって履かせるの？
・馬のおやつ　与えていいもの　いけないもの
○北の（来たの？）獣医師　ブログ「種牡馬の便秘疝」（豆作）
○株式会社　日本馬事普及協会　ホームページ（以下ＨＰ）
○第一次産業ネットＨＰ
○畜産ZOO鑑　ＨＰ――〈護蹄〉
○ブログ・ガラスの競馬場――〈骨折明けの馬〉（次郎丸敬之）
○JOBZUKANＨＰ――騎手の仕事内容はレースだけ？レース開催日以外も生活は多忙
○ブログ・何かいいこと…Something　good――リアルインパクト祝賀会リポート
○サラブレモバイル――西塚助手の項より
・「対談・野中悠太郎騎手①」
・「調教量が多い新馬はそれだけで優位といえます」
○佐藤博紀厩舎・フェイスブック
○ｌｉｆｅｈａｃｋｅｒＨＰ「寝坊と遅刻の常習犯だったルーキー騎手に「プロ意識」が生まれた瞬間」（ライフハッカー［日本版］編集部）
○基礎競馬・ｃｏｍＨＰ「ＧＩレースにむけて」
○四街道グリーンヒル乗馬クラブＨＰ「馬にあげていいものダメな

もの」
○競走馬の故郷案内書ＨＰ　馬産地ニュース「北海道日高装蹄師協会が装蹄競技大会」
○馬事総論ＨＰ「厩務員の一日」
○しろうと女房の厩舎日記ブログ「西山牧場の事務所で」
○ＧｉｇａｚｉｎｅＨＰ「これがレースの舞台裏、競馬場のパドックや専用通路などをのぞいてみました」
○サンスポ ZBAT!競馬 HP「来年から騎乗停止処分開始期間一週間繰り下げ」
【ズームアップ】「調整ルームってどんなところ？」
○ギャンブルジャーナルＨＰ「武豊が「掟破り」の騎手会長再任。今年４８歳のレジェンドに「後継者」が現れないのは競馬界の「恥」？
○日本経済新聞ＨＰ
「栗東の新調教スタンド探訪　巡らせた思い」
「競馬実況アナに欠かせない もう一つの「現場」
○日本調教師会ＨＰ「トレセンマップ」
○東スポＷＥＢＨＰ「藤田菜七子が葛藤激白『女性だからではなく強くなって注目されたい』」
○ニッポン放送ＮＥＷＳＯＮＬＩＮＥＨＰ「まずは次の一勝を目指して一つ一つ」ＪＲＡ藤田菜七子騎手インタビュー【ひでたけのやじうま好奇心】（NEWS ONLINE 編集部）
○netkeiba.com「東奈緒美・赤見千尋のおじゃ馬します！」【女性騎手対談】藤田菜七子×赤見千尋(1)『藤田菜七子の素顔にRAKUTEN 迫る“○×トーク”』
「日本独自の調整ルーム　女性騎手リサ・オールプレスが語る日本と海外の競馬の違い」
○RAKUTEN　TRAVELＨＰ「全国の絶景ラベンダー畑２２選！夏のお出かけにもおすすめ！」
○５ｃｈ@競馬板まとめ・うまちゃんねる「騎乗停止中の騎手って何してんの？」
○キャリアガーデンＨＰ「騎手の仕事――騎手の生活」
○日本馬主協会連合会ＨＰ「ライフサイクル（競走馬視点）」
○ウマ娘攻略まとめ速報ＨＰ

『装蹄師・福永守「骨折と腱断裂以外は全て装蹄で治せる」馬の神様と呼ばれた男の話」
【かぜだっち】風邪をひいてしまったので馬の風邪について調べてみました
○石川県調騎会ＨＰ「厩務員の主なお仕事の流れ」
○ゼロから始める競馬入門ＨＰ「調教コースを知ろう」
○垣外中勝哉ブログ「栗東トレーニングセンター（栗東トレセン）取材　食堂編」
○まい子のヘタ馬パラダイスＨＰ「初の栗東トレーニングセンター（栗東トレセン)新調教スタンド編（まいこ）
○レースマップＨＰ「競馬の主役である騎手の生活」
○みんなの乗馬ブログ「馬の豆知識・馬の五感」
○競馬女子部ＨＰ「出たものの行方」（伊藤春菜）
○ＪＲＡ―ＶＡＮＨＰ「競馬かわらＶＡＮ（リレーコラム）第３８回厩務員の作業レポート（前編）（白川次郎）
○ウェブリーフＨＰ「2000 頭の馬に囲まれて生活している人たちを覗きに「栗東トレーニングセンター」へ行ってみた!」（ウェブリーフ・スタッフ）
○ジブン農業ＨＰ「厩務員になるには?」
○Ｇｌｏｓｂｅ辞書ＨＰ
○SPORTSNAVIＨＰ「晴雨兼用、世にアラジン「競馬巴投げ!第 156 回」１万円馬券勝負（乗峯栄一）
○競馬情報ＨＰ「ウッドチップコースとは?栗東と美浦の違い、基準タイム
○現代ビジネスＨＰ「番長ジョッキー・藤田伸二「間違いだらけの日本競馬界」
○大道牧場ＨＰ・写真など
○BOKUJOBＨＰ
「育成牧場で働こう！」
「装蹄師／倉持達矢さん」
○PIONEERFARM　ＨＰ・施設写真など
○ビッグレッドファームＨＰ・施設写真など
○公益社団法人日本装削蹄協会ＨＰ「装蹄師のお仕事」
○Reverso　Context　お転婆―ポルトガル語への翻訳―日本語の例